公立大学法人　滋賀県立大学

スチューデントファーム

「近江楽座」

まち・むら・くらしふれあい工舎

2015年度　活動報告書

近江楽座＝学生らしさを活かして地域に学び、育ち、貢献できる場　をめざしています

はじめに

地方の大学は地域資源となるか

現在日本全国で活動している地域おこし協力隊員数は、平成 27 年度現在で 2,625 名まで達している。平成 21 年の創設当初 89 名だった隊員数がこれだけ増えた要因は何なのだろうか？“豊かな自然や歴史、伝統文化に恵まれた”というまるで地方の定義のような生活イメージを囁かれ、地方の未来に危機感を持った若者たちが突然、地方に移動し始めたように見える。建築家の黒川紀章氏が半世紀前に提唱したホモ・モーベンス（動民）の社会現象のようにも見える。本当にそうだろうか。交通や情報インフラの発達によって人の移動時間距離が縮小し、情報移動のタイムラグがなくなった。地方同士の移動や連携が容易になり、都市の周縁での活動や生活がスマートで、憧れとして見られるようになったことも要因だろう。地域おこし協力隊員が主役となったTV ドラマ（遅咲きのヒマワリ・2012 年）や、地域おこしに奔走する県庁職員を描いた映画（県庁おもてなし課・2011 年）などが、そのリアルさを後押しして、一気にブームにもなった。昔は寅さんシリーズ（男はつらいよ・1969 ～ 95 年）によって日本全国 100 ヶ所以上の町がロケ地に採用され、地方の魅力や人情を伝えていった。これが後にフィルムコミッションや、アニメツーリズムとして地方行政の戦略に加わった。大河ドラマの誘致合戦、世界遺産への登録推進などもそのひとつだ。最近は地方創生 PR 動画制作が盛んだ。自虐的なものからユーモア溢れるものまで行政の許容幅の広がりには目を見張る。

地域おこし協力隊は、地域の問題解決策として、国の制度として生まれたということを理解しておかないといけない。高齢化、人口減少への地方の危機感に対して、都市住民の移住定住策への布石なのだ。企業や空港、美術館の誘致と同じように大学の誘致合戦が盛んな時期もあった。そのほとんどが行政のお荷物や地域の負の遺産になってしまっている事例が少なくない。そんな国や行政主導の施策にはあまり期待できない。国の制度には綻びが生じることが少なくない。地域活動への入り口は、その土地でしっかりとした日常生活を始めることなのだ。お客さんとしてではなく、普通に生活することが容易でないことを知る、気づく。そして問題を解決しながら魅力ある生活資源を発見していく。自分と地域が一緒に変化、成長していく過程を享受する。将来、未来を描いていく。これが地域活動だと思う。地方の大学は、その地域のその地域で育った学生と全国の地域から移り住む学生の共同体だ。一緒に学び、成長している。若者たちは地方の魅力に気付き始めている。箱物や経済資産のパワーではもう惹きつけられない。

彦根市の場合、滋賀県立大学を含め 3 つの大学の学生と教職員の在籍数だけでも人口の 1 割近くになる。地域がインキュベーターの役割を果たすことで、大学は未来への人材資源の宝庫となる。これから大学に求められる知のリソース（資源）は、あらゆる研究領域で未来貢献できる人材育成と、未来を描く研究活動だ。私たち近江楽座は、地域おこし協力隊が生まれる前から地域の中で活動してきた。その成果は将来必ず、人材や研究成果として地域に帰って貢献につながるだろう。これが地方の大学が果たす役割であり、しかもその活動、存在は既に地域の資源になっている。

平成 29 年 1 月
近江楽座専門委員会委員長
印南比呂志
（人間文化学部 生活デザイン学科）

目次

はじめに 1

1 近江楽座について 5

1-1 近江楽座とは 6
1-2 プロジェクト区分 7
1-3 プロジェクトの採択について 8

2 各プロジェクトからの活動報告 11

2-1 活動実績報告 11
2-2 『らくざしんぶん』 52

3 共通プログラムの報告 59

3-1 活動の安全確保のためのスキルアップ講座 60
3-2 中間報告会「伝えよう！活動のあしあと展」 62
3-3 活動報告会 65

4 学生有志活動 67

4-1 近江楽座 合同説明会「楽座市」 68
4-2 CLS プログラムでの活動紹介 70
4-3 ぞろぞろ会 71
4-4 オープンキャンパス 72
4-5 近江楽座スキルアップ講座「寺 co 屋」 73

5 他大学等との交流 75

5-1 富山県立大学視察 76

6 情報発信 77

6-1 ホームページ、プロジェクトレポート、リーフレット 78

7 付録 79

7-1 プログラム推進メンバー 80
7-2 メディア掲載一覧 81

1 近江楽座について

1-1 近江楽座とは

滋賀県立大学の“スチューデントファーム「近江楽座」－まち・むら・くらしふれあい工舎－”は、地域に根ざし、地域に学び、地域に貢献する。」を目的とする学生主体のプロジェクトを募集、選定し、全学的に支援する教育プログラムです。

平成16年度に文部科学省「現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム(現代GP)」に採択され、平成18年度までの3年間の活動実績が大学発地域貢献の先進的な取り組みとして学内外で高く評価されました。そして、翌平成19年度からは大学独自の予算を用いてプログラムを継続し、平成27年度までの12年間で延べ265のプロジェクトが地域と連携した活動を展開しています。

教育効果を高め、大学と地域の連携を深めるための3つの目標

- 地域の課題に大学・学生が取り組み、地域の活性化に向けて共に活動する。
- 学生が地域の方々と一緒に活動することにより、学内だけでは学べないことを体験する。
- 大学と地域が共同して、よりよい地域づくり・人づくりにつながるしくみをつくる。

3つのサポートシステム

近江楽座専門委員会・学生委員会・近江楽座事務局（地域共生センター）の連携の下、3つのサポートシステムにより、全学的に活動を推進しています。

■ 活動助成システム

“スチューデントファーム「近江楽座」”として選定されたプロジェクトの事業計画に基づき、活動に必要な事業費を審査し、助成します。

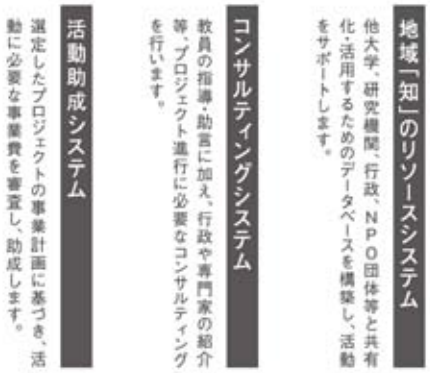
■ コンサルティングシステム

教員の指導・助言に加え、行政や専門家の紹介など、学生がプロジェクトを進めていくために必要なコンサルティングを行います。

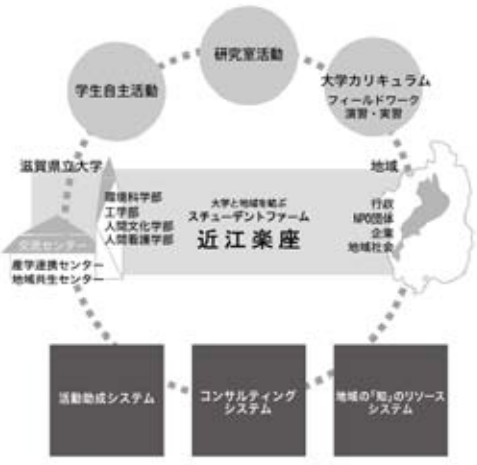
■ 地域「知」のリソースシステム

大学と地域連携に係わる情報を他大学、研究機関、行政、NPO団体などと共有化・活用するためのデータベースを構築し、活動をサポートします。

＜3つのサポートシステム＞



＜サポートシステム概念図＞



1-2 プロジェクト区分

平成 19 年度より、「地域活性化への貢献」をテーマに学生主体の地域活動を行う「A プロジェクト」に加え、新たに、自治体や企業等から提示された課題について、学生主体のプロジェクトチームを結成し活動する「B プロジェクト」がスタートしました。

Aプロジェクト

「地域活性化への貢献」をテーマとする学生主体の地域活動プロジェクト。

- 継続プロジェクト
  - Sプロジェクト（平成23年度より開始）
    活動資金の助成を必要とせず、これまでの実績をもとにステップアップを目指す取組み
- 新規プロジェクト

Bプロジェクト

学生主体のチームが自治体や企業等から提示された課題に、プロポーザル方式で企画提案を行い、選定されたチームと依頼先とが共同で取り組むプロジェクト（平成19年度より開始）

| A プロジェクト

「地域活性化への貢献」をテーマとする学生主体の地域活動を募集します。

昨年度までの継続活動を対象とした①「継続プロジェクト」、新規活動を対象とした②「新規プロジェクト」、さらに平成 23 年度から新たに③「S プロジェクト」として、これまでの実績をもとにステップアップを目指すプロジェクトで活動資金の助成を必要としないプロジェクト、の 3 つの区分で募集し、支援するプロジェクトを選定しています。

| B プロジェクト

自治体や企業、団体等から依頼のあった課題について、「近江楽座」として取り組むテーマを設定し、学生主体のプロジェクトを募集します。学生チームにはテーマに対する企画提案を求め、採択されたチームは、指導教員と地域共生センターがフォローし、依頼先と共同で取り組みます。

1-3 プロジェクトの採択について

| プロジェクト募集期間

A プロジェクト
日　時：2015 年 4 月 10 日（金）～ 5 月 7 日（木）

| 募集説明会

A プロジェクト
日　時：2015 年 4 月 20 日 (月) 12:30-13:00
場　所：滋賀県立大学講義棟 A4-107

| 応募件数

A プロジェクト　21 チーム
うち継続プロジェクト 18 件
(S プロジェクト 1 件含む)

| プロジェクト審査

A プロジェクト「公開プレゼンテーション・審査会」
日　時：2015 年 5 月 16 日 (土) 9:30-16:00
場　所：中講義室　A7-102
内　容：プレゼンテーション（プレゼンテーションシートによるプロジェクト説明）および質疑応答、審査（非公開）

選定委員（順不同　敬称略）：

○ 滋賀県立大学理事 副学長　濱﨑一志
○ 滋賀県立大学人間看護学部 教授　横井和美
○ 滋賀県立大学人間文化学部 講師　武田俊輔
○ 今郷好日会顧問、
神戸薬科大学・近畿大学 非常勤講師　吉井隆
○ デザイン・クリエイティブセンター神戸（KIITO）
チーフスタッフ　中野優

| 採択および採択通知

A プロジェクト
日　時：2015 年 5 月 22 日（金）
通知方法：近江楽座ホームページおよび学生ホール掲示板にて通知

| 採択件数

A プロジェクト　20 チーム
うち継続プロジェクト 18 件
(S プロジェクト 1 件含む)

| 活動説明会

A プロジェクト
日時：2015 年 6 月 1 日 (月) 12:20-13:00
場所：講義室 A4-107
内容：採択プロジェクト代表者に対する事業計画、会計処理等の進め方に関する説明会

活動説明会の様子

<公開プレゼンテーションの様子>

事前に審査員の先生方にそれぞれの応募チームの事業計画書と予算計画書に目を通してもらい、公開プレゼンにて各チームの発表・質疑応答をふまえて、採点・審査を行いました。

チームはプレゼンシートを用い、プロジェクトの目的・意義や活動内容について4分間の発表を行いました。プレゼンテーション後は、3分間の質疑応答があり、審査員の先生方からプロジェクト内容に対してのするどい質問がなげかけられました。

2 各プロジェクトからの活動報告

2-1 活動実績報告

01 とよさと快蔵プロジェクト 12
02 あかりんちゅ 14
03 地域博物館プロジェクト 16
04 未来看護塾 18
05 政所茶レン茶ˇー 20
06 内湖における侵略的外来種駆除 22
07 フラワーエネルギー「なの・わり」. 24
08 障がい児・者、自立支援・共生社会プロジェクト 26
09 人と環境を救う雨水タンク 28
10 信・楽・人 -shigaraki field gallery project- 30
11 木興プロジェクト 32
12 たけとも（竹の会所・友の会） 34
13 おとくらプロジェクト 36
14 男鬼楽座 38
15 Taga-Town-Project 40
16 かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY- 42
17 たのうらまちづくりプロジェクト 44
18 タクロバン復興支援プロジェクト 46
19 とよさらだプロジェクト 48
20 八坂町プロジェクト 50

次ページ以降のチームデータについて補足説明

※近江楽座活動年度について
H ：不参加
H ：参加
を示しています

※メンバー数は、活動に関わった学生の総数です。

01 とよさと快蔵プロジェクト

空き古民家活用で豊郷町のまちづくり

使われなくなった民家や蔵が点在する豊郷町で、空き家をまちの資産として活用し、地域を盛り上げる活動を行っています。地域のイベントへの参加やイベント企画、蔵を改修したBAR運営なども行い、まちを盛り上げる人たちをサポートしています。

TEAM DATA

チーム名：とよさと快蔵プロジェクト
代表者：廣瀬奈々（環境科学部）
メンバー数：51名
指導教員：迫田正美（環境科学部）
活動場所：犬上郡豊郷町、学内
関係団体：NPO法人とよさとまちづくり委員会
近江楽座活動年度：H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24 H25 H26

PROJECT 実施事業

(1) ゲストハウス改修
★見出し写真：改修コンペ最終発表 (07/19)

(2) タルタルーガ（運営、イベント、出店）

タルタルーガ営業の様子（10/03）

(3) 旧豊郷小学校ハロウィンイベント

とよさとハロウィン会場の様子（10/31）

(4) ミツマルシェ

(5) 八町地蔵盆

(6) カイゾウノススメの作成

(7) 豊郷町のイベント参加

(8) 定例ミーティング

(9) 活動広報

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

今年度の大きな活動であった新物件の改修は夏休みから取り掛かることでができ、たくさんのメンバーが参加してくれた。1、2回生は改修作業がしたいという目的をもってメンバーになっている人が多いため、例年に比べ参加率が高かった。

町内のイベントにもたくさん参加できたが、メンバーが固定されていたり、1回生があまり参加しないことが多かった。ここ数年、メンバーが増え、町内のイベントに参加する目的を全員に共有しきれていないことが原因であると考えられるため、今後どのように伝えていくのかが課題となる。

また今年のミツマルシェは、例年に比べゲストさんが個性豊かであった。しかし、企画を始めるのが遅かったため、ゲストさんの決定から告知までが遅れてしまった。改修作業で忙しいということを見据え、前もって担当を割り振り、もっと早い時期に企画を進めるべきであった。そこを改善すれば来年はもっとお客さんを集められるだろう。

タルタルーガは下級生が早くから入ってくれたため、シフト管理や営業に関する引き継ぎの負担が減り、まちの方々に早くに顔を覚えてもらうこともできた。来年度もこの調子で続けてほしいと思う。

このように例年に比べメンバーの数が増えるにつれ活動の幅が広がり、一つ一つの活動に対しても比較的に密に取り組めたのではないかと思う。全体としては、メンバー個々のモチベーションにはばらつきがあるため、年々増加傾向にあるメンバーのモチベーションをどのように保つかということが今後の課題であると考える。

活動を通して学んだこと

私たちが改修作業をしている時に、地元の方が様子を見に来てくださったり、差し入れをくださったり、道具を貸しに来てくださったりしました。このプロジェクトの活動は、地元の方の理解と支援があって成り立っていることが改めてわかりました。

奥埜慎也（環境建築デザイン学科 2 回生）

古民家の改修を始め、学生が運営する BAR に店員として立つことで、豊郷町という場所とそこに住む人々との交流を持つことができた。学生が積極的にまちに関わることで現状を知り、まちづくりを共に考えることができるのだと思う。来年度の活動へのモチベーションに繋げたい。

鈴木めい（環境建築デザイン学科 1 回生）

今年は1回生という立場からか、与えられた作業やイベントに参加する様な受け身な活動になってしまった。しかし、豊郷町と関わりをもち、地域の人達と繋がりができたことは大きな収穫であった。今後プロジェクトを続けていく中で、この繋がりをきっかけに、もっと主体的になって活動していきたい。

久保田有紀子（環境建築デザイン学科 1 回生）

本大学だからこそできることを始めようと思い、所属したのがこの団体でした。学生と町の人々の距離が近く、初めは戸惑うこともありました。しかし、町のイベントに参加する側として、また作る側として関わることで戸惑いから愛着へと変わっていきました。町に入り込むことが必要だと思いました。

高田拓夢（環境建築デザイン学科 1 回生）

地域からのコメント

NPO 法人とよさとまちづくり委員会 理事長　北川稔彦さん

とよさと快蔵プロジェクトの活動も 10 年を過ぎるほどとなりました。活発に活動される学生さんが卒業してしまうと尻すぼみで活動停止になりがちですが、これほど続けて活動してくれてありがたく思います。続いていることもそうですが、歴代の卒業生が現役の学生さんにアドバイスしていることがあるなど、それぞれの卒業した学生さんや現役の学生さんが豊郷という町に思いを持って活動してくれていることをうれしく思います。

NPO 法人とよさとまちづくり委員会 副理事長　岡村博之さん

いつも、学生の皆さんの活動に地域のものとして本当に感謝しております。現在のメンバーの皆さんは、12 年目の活動を先輩から続け、更に新しい思いで取り組んで頂いている事も凄く、活動の拡大と変化を感じています。サークル的に活動してきた事が、いよいよ、社会的に認知されるものとなり、一緒に活動させて頂いている NPO や町や各種団体にも大きな存在となっています。

指導教員より

環境科学部　迫田正美

活動 10 周年を経て、これまでの活動、これからの活動について OB や現役生、まちづくり委員会の方々とも認識を新たにできたことは大きな成果であった。活動の広がりも単に古民家の改修にとどまらず、各種の団体との交流や他の楽座グループとの協働など、地域に浸透することができたことも活動の視野の広がりと深まりを実感させるものであった。

次年度からは事業としての古民家再活用の幅もシェアハウスにとどまらないものとなるので、地域の方々とどのように役割分担していくのかを整理していくしていくことも課題となる。学生として、また大人としての自覚をもって臨んでもらうことを期待する。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**

ミツマルシェ ポスター

カイゾウノススメ 4

＜その他成果物＞
ミツマルシェ リーフレット
新入生歓迎会チラシ
ビアガーデンポストカード
八町地蔵盆ポスター
とよさとハロウィンポスター

02 あかりんちゅ

エコでスローな夜を

お寺などからいただいた使用済みの廃棄蝋燭を再利用してリサイクルキャンドルを作り、キャンドルナイト、キャンドル作り教室、キャンドル販売などを行っています。自分たちで運営資金をまかない、独自予算で活動している唯一のSプロジェクトです。

TEAM DATA

チーム名： あかりんちゅ
代 表 者： 辻紗貴子（人間文化学部）
メンバー数： 22名
指導教員： 平山奈央子（環境科学部）
活動場所： 学内、滋賀県内各地、岐阜県大垣市
関係団体： ひこねキャンドルナイト実行委員会
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 **H21** **H22** **H23** **H24** **H25** **H26**

PROJECT **実施事業**

(1) ティーライトキャンドル製造委託

(2) 湖風夏祭キャンドルナイト・コンサート

(3) ひこねキャンドルナイト

(4) 笑顔がいっぱい商店街キャンペーン

ハンドベル演奏（11/07）

(5) 湖風祭キャンドル作り教室

(6) OKBストリートキャンドルナイト

(7) 彦根灯花会バレンタインキャンドルナイト
★見出し写真：バレンタインキャンドルナイト（02/14）

(8) 豊郷キャンドルナイト

(9) 信楽焼キャンドルホルダー作り

(10) 2015滋賀びわこ総文　かき氷キャンドル提供

(11) ミツマルシェ

(12) 「テレビ滋賀プラスワン」滋賀県立大学特集取材

(13) 生協ショップ クリスマスキャンドル販売

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度は、申請時に計画したことをすべて達成できた。中でも、ティーライトキャンドルの製造委託が実現したことは大きな成果であると考えられる。キャンドルナイトなどのイベントで地域に貢献するだけでなく、実際に地域の企業にお金を還元することで、Sプロジェクトとして新たな地域貢献の道が開けた。また、委託を行うことで、商品キャンドルを製造する余裕ができ、様々なキャンドルを開発することができた。

目標を無事達成できた理由には、申請前から前年度の活動内容を見直して改善したり、メンバーの意見を積極的に取り入れたことがあるだろう。今年度のコアメンバーは、1回生の時から3年間ずっとあかりんちゅで活動してきたメンバーである。今までの経験を踏まえて、今年の活動に役立てられたことは目標達成の一つの要因である。

例年通りキャンドルナイトの依頼をたくさんいただいたが、イベントの多い季節だとメンバーにとっては大きな負担になることがあった。私達は費用をいただいてイベントを行っているため、特に一つ一つのイベントに責任を持たねばならない。一つの事業が中途半端なものにならないよう、本当に依頼者があかりんちゅを必要としてくれているのか、私達もきちんと依頼を遂行できるのか考え、イベントを受けていくことが大切だ。多忙な時期には事前の準備がギリギリになってしまったことは今後の課題である。来年度は、準備物や今ある物品を今一度把握し、スムーズな運営が行えるよう整備し直すという見通しもすでに立っている。

活動期間が長くなると、当初の理念や目的が薄れがちになる可能性がある。あかりんちゅも6年目を迎え、発足時のメンバーすべて入れ替わった今、改めて理念や目的を明確に活動していく必要がある。そうすることで今まで築いた基盤をもとに、さらに充実した活動を続けていけるのではないか。

活動を通して学んだこと

廃ろうそくを使って新しくキャンドルを作り、それを買ったり売ったりして色んな人とコミュニケーションをとることで、ものを大事に使うことの大切さを改めて実感した。また、ろうそくを提供してくださる方や、イベントに関わってくださる方とも交流し、人としても成長することが出来た。

土田侑奈（生活栄養学科 2 回生）

チームで活動していく難しさを改めて感じました。しかしその分、みんなで協力し、一人では到底出来ないようなことができたときは、大きな達成感と成果が得られました。また、活動は今までの積み重ねがあってこそできているもので、息の長い地域貢献が求められると考えました。

辻紗貴子（人間関係学科 3 回生）

私が参加したミツマルシェには、近江楽座や地域の方々、他の地域からこのために来てくださった方など様々な人が参加されており、活気があった。イベントは、地域の方々だけでなく他の団体とも協力すれば、新たな経験になるだけではなく、活動も新鮮なものになり、より楽しくなると考えた。

西山浩史（環境生態学科 2 回生）

地域からのコメント

社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団クリエートプラザ東近江ジョブカレ
大橋佳織さん

受託業務をさせていただいていて、特に困ったことはなく、やり取りもスムーズにさせていただくことができました。やり取りをさせていただく前は、学生さんという事もあり、不安もありましたが、私達以上にしっかりとされていたため、安心して業務受託をさせていただくことができました。ありがとうございます。

指導教員より　（抜粋）　環境科学部　平山奈央子

既存の活動を継続しながらも一つ一つの取り組みに改善や工夫が見られ、積極的に活動を実施していると思います。外部の関係者からの依頼を受けたり、イベントなどを共同で開催することによって活動メンバーそれぞれに学びや反省があったのではないでしょうか。

限られた資源、人材、時間のなかで複数の活動を実施するために、団体の組織運営の面でも難しい局面があったかもしれません。それらを体験できたことであかりんちゅとして実施したいこと、外部団体との約束で実施しなければならないことがあったかと思います。大学生の活動は活動者が年々変わることが大きな特徴です。それと同時に、組織運営や活動内容の見直しや継続を考える必要が出てきます。もちろん1年ごとの目標や活動計画はあると思いますが、社会貢献、地域貢献を考えた場合に、あかりんちゅが解決したい課題は何なのか、その課題は地域の現状に合っているのか、大きな課題の中であかりんちゅが貢献できる部分はどこなのか、などについてメンバーで話し合ってみることをお勧めします。

地域貢献活動は地域の課題解決のための活動なので、手を動かす人、知恵を出す人、お金を出す人など地域内で様々な役割分担が想定できます。そういう仲間を見つけながら、あかりんちゅはどこを分担できるのかを発信することで自然と仲間が増え、あかりんちゅだけでは達成できないことにも取り組める可能性が広がると思います。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**

リーフレット

湖風夏祭販売用キャンドル
（開学２０周年記念キャンドル）

＜その他成果物＞
ハートのキャンドル
ハロウィンキャンドル
ビンキャンドル
湖風祭販売用キャンドル
琵琶湖のキャンドル
生協販売キャンドル
信楽焼キャンドルホルダー（→ P31）

03 地域博物館プロジェクト

文化財を救え！我ら学生学芸員！

民具や古文書、お祭りなど、地域には多くの文化財があります。“地域文化財”や地域の歴史・文化などを住民の方々とともに調べ、活用し、“地域博物館”をつくりあげていくことで、地域の魅力を再発見することをお手伝いします。

TEAM DATA

チーム名： スチューデント・キュレイターズ
代表者： 渡邊文乃（人間文化学部）
メンバー数： 17名
指導教員： 市川秀之、東幸代、武田俊輔（人間文化学部）
活動場所： 高島市、守山市、米原市
関係団体： 白谷荘歴史民俗博物館
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 **H24** **H25** **H26**

PROJECT **実施事業**

(1) 白谷荘歴史民俗博物館事業

★見出し写真：白谷荘歴史民俗博物館調査（02/21）

(2) 下之郷史跡公園各種活動事業

(3) 奥伊吹調査事業

奥伊吹調査合宿 (01/23)

(4) 博物館夏祭り事業

白谷荘模型作り (08/21)

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

下之郷史跡公園での活動では、地域の方の認知度が徐々に上がっていることを実感した。これは、2年前からの継続した活動への参加や、今年度イベントへの参加回数を増やせたことが要因であると考える。しかし、まだ「地域博物館プロジェクト」というよりは「滋賀県立大学の学生」という認識の方が強いようで、なかなか民具調査への活動につなげられずにいる。民具調査は学生だけでなく、地域の方の協力があってはじめて行うことができる。それ故に、地域の方の思いや意見を尊重し、話し合いを進めながら民具や本プロジェクトの活動について、理解と協力を仰いでいきたい。

今年度は、平成25年度より毎年関わりのあった滋賀県博物館協議会のご厚意で、「博物館夏祭り」へ参加することができた。名だたる博物館にまじって展示ブースを構えられたことは、地域博物館プロジェクトへの認知や理解が進んでいることもあり、良いアウトプットの機会となった。博物館に訪れたことのない人々への情報発信という点において非常に意義深いことであったといえる。もちろん、展示･解説の方法においては改善の余地が残るが、県内各館の対象に合わせた展示作りは大変勉強になった。

年間を通して、活動回数は少ないのかもしれないが、一回一回の調査やイベントの内容が濃く、どの活動をとっても学びと発見にあふれたものであった。近江楽座内でも近年問題となっている「活動の引き際」についても、近すぎず、かといって離れもしない互いに自立した関係を保ち続けることによって、地域との絆と自分たちの活動の継続という両方のメリットを得ることができた。今後は、これまでの経験を活かし、調査活動の効率化と展示の質の向上を目指したい。

活動を通して学んだこと

私は主に下之郷史跡公園での活動や、大学で行われた湖風祭やオープンキャンパスでの展示に携わりました。また、昨年度は予定が合わずなかなか参加できなかった白谷荘歴史民俗博物館での調査にも参加し、白谷荘の現状や調査状態を確認することができ、とても勉強になりました。

上田睦美（地域文化学科 3 回生）

博物館夏祭りでは、滋賀県博物館協議会のご厚意で、県内の名だたる博物館に混じり展示ブースを構えることができた。各館の工夫に満ちたブース展示を身近で見ることによって、これまでの本プロジェクト展示にはなかった視点に気付くことができた。今回の学びを、ぜひ今後の活動に活かしていきたい。

渡邊文乃（地域文化学科 3 回生）

一年を通して様々な活動に従事したが、中でも奥伊吹での活動は心に残っている。大寒波による積雪の中おこなう民具調査は困難を極めたが、奥伊吹の生活環境を理解するうえでは非常に意義深いことであった。今後も様々な活動に参加したい。

浜奈緒子（地域文化学科 3 回生）

地域からのコメント

白谷荘歴史民俗博物館 館長　川島光男さん

西近江地方の博物館（旧民俗資料館）に長期にわたり継続的に調査・維持・保存に携わっていただいており感謝しています。貴重な時間をさいて休日に、数台の自家用車に乗り合わせして、手弁当で来ていただいています。学生さん方の活動資料を参考にして一般ボランティアグループの方々にも連携して調査・維持・保存に御協力いただいています。

地方の文化・資料が時代の流れにおきざりにされていくように感じられる昨今、皆様方のおかげでなんとか地域の博物館として成りたっております。当館のアピールと共に皆様方の活動も機会あるごとにアピールしていきたいと思います。

大勢の学生さんに地域の現状にふれてもらい、地域文化を守る皆様の活動の意義を感じて貰えればありがたいです。当館もいままで以上に地域文化を守るために又、内部資料を活用してもらうためにがんばっていきます。

指導教員より

人間文化学部　市川秀之

地域博物館プロジェクトの 2015 年度の活動は、例年おこなっている高島市の白谷荘歴史民俗博物館や米原市の甲津原での調査活動、あるいは守山市下之郷での一般向け普及活動を順調におこない、また新たに滋賀県下の博物館が一堂に会しておこなう博物館夏祭りにも参加するなど、きわめて活発なものであった。ことに博物館夏祭りでは、全体として 800 人以上の来館者があり、そのうち約 200 人に展示品を鑑賞していただくなど大きな普及青果があった。年度当初は 1 回生の加入がなく将来の継続性が危ぶまれたが、最近の活動には一回生の参加もみられるようになってきている。今後さらに新たな活動に挑戦してほしい。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**

白谷荘模型

湖風祭ポスター兼チラシ

＜その他成果物＞
博物館夏祭り展示パネル
白谷荘模型制作スライド動画
湖風祭展示パネル
前期活動紹介スライド動画
下之郷遺跡まつ 2015 ポスター
地域博物館プロジェクト紹介パネル

04 未来看護塾

地域に根ざした活動でみんなが健康に

地域の人々や看護職、ボランティアの方々といった医療現場の全ての人々と交流する機会を持ち、看護における対人関係の意義を学ぶとともに、人との関わりから人が人としてその人らしく生きる力となれるよう、活動しています。

TEAM DATA

チーム名： 未来看護塾
代 表 者： 松本義礼（人間看護学部）
メンバー数： 139名
指導教員： 伊丹君和（人間看護学部）
活動場所： 彦根市内、宮城県南三陸町歌津地区田の浦
関係団体： NPO法人ぽぽハウス、彦根市立病院、城南保育園
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24 H25 H26

PROJECT 実施事業

(1) 彦根市立病院まつり「ちびっこ広場」

(2) 湖風夏祭・湖風祭での「ちびっこ広場」

(3) ビバシティ彦根「応援！生き活き健康生活！」

(4) はばたき集団プログラム

(5) 野瀬町地蔵盆

地蔵盆 (08/16)

(6) 宮城県南三陸町「いきいき健康交流ひろば」
★見出し写真：田の浦交流センターでの「いきいき健康ひろば」(11/22)

(7) はばたきチャレンジャー

(8) 彦根市民病院小児病棟でのクリスマス会

(9) パストラールとよさとにて「美味食楽」への参加

(10) ぽぽハウス主催のイベント参加

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

今年度の大きなイベントであったビバシティでの「生き活き支援活動」では、普段活動している1・2回生だけではなく、3～4回生や教員、卒業生にも参加していただくことで、柔軟に対応できた。1・2回生にとっては先輩方の地域の方との交流の仕方を間近で見る良い機会になり、コミュニケーション方法や健康に関する専門的な知識など学ぶことが多かった。毎年継続している未来看護塾ならではの縦のつながりを活かした活動が行えた。

昨年に引き続き行った11月の宮城県南三陸町での活動では、関係性を築くことができていると実感できた。「いきいき健康ひろば」は、未来看護塾主催で一から企画を行った。健康に焦点をあてた内容で、看護学生として被災地でできる活動を考えた。企画から自分たちの力で考えることで、学生一人ひとりの企画力、実行力が養われた。また、現地の方たちと話す機会がたくさんあり、そのなかで被災者の生の声を聴くことができ、いま自分に何ができるのか、一人ひとりが考える良い機会になった。被災地の活動では、特に現地のニーズを取り入れた活動が求められるため、情報収集に力を入れることが必要だと考える。

未来看護塾の大きな課題は、それぞれの活動に参加するメンバーが固定されてしまっていること、参加人数が集まらないことが多いことである。活動内容がますます幅広くなってきているので、メンバー全員の積極的な参加が必要となる。情報共有をしっかり行い、それぞれが意識を持って活動できるよう工夫していきたい。

今後も、縦のつながりを大切にし、活かしながら、幅広い方々を対象に心も体も生き活きと健康になっていただけるような活動を行っていきたい。同時に学生一人ひとりが看護職者を目指すうえで必要とされるスキルを身につけていくことができたらと考える。

活動を通して学んだこと

未来看護塾の活動のなかで、幅広い方々と触れ合い、人と人とのつながりの素晴らしさに気づくことができた。また、今しかできない貴重な経験がたくさん出来た。この経験を、看護職者を目指すうえで活かしていきたい。

松本義礼（人間看護学科 2 回生）

授業で学んだことを地域の方との関わり合いの中で生かすことができた。多くの方に喜んで頂け、とてもやりがいがあり、楽しい活動であるとともに、性別・年代の異なる様々な方との関わり方を学ばせて頂ける学生の成長の場でもあり、非常に貴重な経験ができた。

荻邑子（人間看護学科 2 回生）

多くの人と実際に関わらせていただき、個別性に合わせるという難しさを感じた。その中で自分で考えて行動し、感謝の言葉が聞けた時やその人の笑顔を見れた時は本当に嬉しかった。様々な人がいるからこその難しさや、難しいからこそ得られる達成感があるということを活動を通して学んだ。

水上優花（人間看護学科 2 回生）

地域からのコメント （抜粋）

特定非営利活動法人 NPO ぽぽハウス　藤澤聡さん

NPO ぽぽハウスは、障害児デイサービスの拠点が3箇所あります。年齢も概ね2歳～18 歳未満の子ども達です。施設により対象児童の年齢は異なります。未来看護塾の皆さんの位置付けは、10 代の子ども達にとっては、自分達に近い兄姉の存在で憧れがあるようです。また普段私達にはしないような、生活面や好きなタレントなどの質問を興味津々でしたりする姿が見受けられます。子ども達にとって養護学校と家族、私達スタッフ以外での社会との接点であるようです。一方皆さんも言葉でのコミュニケーションが難しい子どもへは、出会うごとに寄り添う姿、受容する力がアップしている事にも気づかされます。人と人が関わる事を大切にしたい私達法人の思いと合致した皆さんの活動に感謝と今後もお力添えをよろしくお願いしたいと思います。

指導教員より （抜粋）　人間看護学部　伊丹君和

未来看護塾は「近江楽座」とともに育ってきました。人間看護学部の1期生たちが立ち上げて以来，12 年間継続して活動を続けています。ビバシティ彦根における「応援！生き活き健康生活」では卒業生たちの協力も得て、防災・健康イベントも行いました。

「近江楽座」の活動は、地域課題の解決とともに、学生の自ら学ぶ力、それぞれの専門分野への興味・関心や知識・技術を高めるものであり、教育的な効果も大きいと考えています。各プロジェクトにおける学生間の縦と横のつながりの関係性はもちろん、地域住民との関係性など、自ずと社会性やコミュニケーション力の向上にもつながります。また、悩み試行錯誤を重ねながら企画実施する中で、実行力と豊かな感性をも育んでいます。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**

みかん通信 2015 vol.1 ～ 4

05 政所茶レン茶゛ー

お茶づくりを通じて地域活性化を図る

滋賀県東近江市政所町にて、お茶づくりを通して地域活性化にチャレンジしています。本学の授業「地域再生システム（特）論」をきっかけに結成されました。お茶づくり、集落向け情報誌の発行、地域イベントの開催の3本を軸に活動しています。

TEAM DATA

チーム名： 政所茶レン茶゛ー
代 表 者： 苗村リサ（工学部）
メンバー数： 14名
指導教員： 上田洋平（地域共生センター）
活動場所： 東近江市政所町
関係団体： 東近江市役所
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24 **H25** **H26**

PROJECT **実施事業**

(1) お茶づくり

ススキ取り (08/09)

(2) 情報誌（政所茶レン茶゛ーナル）の発行

(3) イベント
★見出し写真：茶摘みイベント (05/23)

茶摘みイベント　集合写真 (05/23)

(4) 他所のイベントへの参加

(5) 勉強会

(6) 魚粉活用（滋賀県大の BASSER'S とのコラボ）

(7) ネットによる情報発信

(8) ″飛び出しまんちゃん″看板の設置

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

月2回と活動日前に学生内で打ち合わせを行ったことによって、活動日に何をするかメンバー内できちんと情報共有でき、当日の作業がスムーズに行えた。

学業やバイトで忙しい中、適切な時期にしっかりと畑作業を行うことができた。茶畑は急な斜面にあり、足元が悪い。慣れていないと作業しにくい場所であるのにもかかわらず、このように一年間続けられてきたのは、地域の方々とコミュニケーションをとったり、普段味わえない政所の自然を味わったりするなど、目的をしっかり持って活動してきたからであると考えられる。

申請時には、地域調査やオリジナル急須の作製をしたいと考えていたが実行できなかった。オリジナル急須の作製においては、急須を作製することの楽しみを味わいたかったが、月が経つにつれて、私たちは急須を作ることが目的ではないと思い実施に至らなかった。急須を作りたいという気持ちはあったが、急須を作ってからその急須をどのように生かすのかまでは考えられていなかった。今後何かしたいという気持ちがあるのなら、その事業がどのように活用できるのかなど明確な目的を持って事業に取り組むべきである。政所以外の集落での地域調査においては、外からのイベントの依頼が多かったり、お茶づくりの事業がメインであったので実施できなかったと考えられる。

活動の中に新たな挑戦を試みても、これまで築き上げてきた地域の人たちとのご縁は変わらずに大切にしていく。むしろ、もっと地域との距離を縮めていきたい。世代は違えども、地域の方々は私たちに対してとてもよくしてくださった。世間話をする感覚で、もっと政所の人たちとの関係性を深められるよう心を解していきたい。

活動を通して学んだこと

一年間の活動で、地域の方に手助けしてもらうことがたくさんありました。地域のことを一番真剣に考えている地域の方が、できることも少ない学生を迎え入れてくれるのは、今まで先輩たちが地域の方と積み上げてきた信頼関係のお陰で、自分たちも信用されているからだと感じました。

大賀雄介（環境生態学科１回生）

一年間の活動を通じて、自ら育て作ったお茶を販売する達成感を感じました。肥料入れや草引きなど骨の折れる作業がたくさんあり、苦労しましたが、おいしいお茶を飲んでもらうためには必要であるとわかりました。これからも政所茶の認知を広げるお手伝いができればと思います。

奈佐綱一郎（機械システム工学科１回生）

活動を通じて学んだことは、主体的に取り組むことです。私は２年生の途中に偶然活動に参加する機会があり、それがきっかけで今に至っています。活動期間はメンバーの中で一番短く、まだまだわからないことだらけですが、だからこそ、自分から進んで理解を深めていこうとする気持ちで活動出来ました。

林宏樹（地域文化学科２回生）

地域からのコメント

政所茶農家　白木駒治さん

きばってやってくれているので感心しています。お茶は自然にやから、土日（私たちの活動日）に合わせられへん。1 週間休みをもらってお茶の世話をやってもらわんと、お茶の成長に合わせて摘むことができん。学校があるからなかなか難しいかもしれん。

山形蓮さん（発足当時のメンバー）から 5 年活動してくれて、政所茶が復活して、大阪や東京へ政所茶の名が売れてきている。政所茶が継承していると感じている。

ずっと続けてやっていくように。始めに言ったように、1 年、2 年で棒に振らんようにということで、畑を貸している。これからも続けていくよう頑張ってください。

指導教員より

地域共生センター　上田洋平

「前途少難」で行こう！

引き続き地元の人びと、行政の皆さんのありがたいご理解と応援のおかげで、そして新たに茶レン茶 " ーから「のれんわけ」した社会人女子による「茶縁の会」の活躍も相俟って、政所茶に復権の兆しが見えはじめた。ブランド化の話も進んでいる。お年寄りたちがそのまま生産していたのでは起らなかったことかもしれない。他所者、若者すなわち「風の人」たる茶レン茶 " ーの面目躍如といったところ。「土の人」たちも概ね評価して下さっており、これには自信を持ってよい。

いっぽう創業メンバーが卒業し、二代目代表も引退、世代交代である。「売家と唐様で書く三代目」。古今様々な分野の様々な事業には「三代目のジンクス」が付きまとう。順風満帆にかまけて居眠りしていると座礁する。だから、前途多難は困るけれども、少しの難儀は望むところの気概で行こう！

DELIVERABLE　**成果物／制作物**

情報誌「政所茶レン茶゛ーナル」

政所茶煎茶／春番茶

06 内湖における侵略的外来種駆除

守ろう！琵琶湖の在来魚

琵琶湖の内湖である神上沼において、オオクチバス・ブルーギルをはじめとした侵略的外来種の駆除・研究を行なう。また、駆除体験イベントや川遊びイベントを開催し、外来生物問題について知ってもらい、地元の水辺に親しみや興味を持ってもらう。

TEAM DATA

チーム名： 滋賀県大 BASSER'S
代 表 者： 北野大輔（環境科学部）
メンバー数： 14 名
指導教員： 浦部美佐子（環境科学部）
活動場所： 彦根市神上沼、滋賀県内
関係団体： 全国ブラックバス防除市民ネットワーク
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 **H23** **H24** **H25** **H26**

PROJECT **実施事業**

(1) 出前授業「田んぼの生き物勉強会」

能登川東小学校での出前授業 (07/02)

(2) 県大水路探検隊

県大水路探検隊 (07/20)

(3) 神上沼定例駆除活動
★見出し写真：神上沼定例駆除活動 (05/02)

(4) 生き物観察会@愛西土地改良区

(5) 外来水草駆除活動

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）

今年度で、我々の活動が始まってから 5 年が過ぎた。ここまで活動を続けることができたのは、多くの方からの支えがあったからに他ならない。

神上沼での駆除活動および啓発活動を継続して続けてきた結果、地域からの信頼もより厚くなってきていることを感じた。今年度行なった啓発活動は、多くが主催者および協力団体から依頼されたものであり、時には小学校の出前授業や生き物とりの講師の依頼もあった。地域のニーズにこたえることができ、団体として大きく成長できた 1 年であったと感じている。滋賀県大 BASSER'S は、単なる駆除活動を行なうだけではなく、広義での環境教育活動を行なう団体でもあるべきだと私は考える。今後も、地域の中に入った活動を行う。そして、多くの人に水辺の環境に親しんでほしい。

また、今年度は我々の活動を外部に報告する場に出席し、積極的に活動のアピールを行った。このような活動をしている学生団体は全国でもまだまだ少なく、先駆的な例として自信を持って、より発展した活動を展開していこうと、思いを新たにした。

来年度以降も、我々は活動を続けていく。しかし、6 年目を迎えるに当たり、新たな活動や目標の設定が必要である。また、啓発活動では下級生の能力不足を感じる部分もあり、上級生が参加しないと成り立たないのが現実である。上級生が持つノウハウを下級生に伝え、メンバーがより大きく成長することを願う。滋賀県大 BASSER'S が今後どのような活動をしていくのか、また地域で必要とされていることは何なのかをしっかり考え、永く継続する団体になるよう努めたい。

活動を通して学んだこと

当団体は、外来魚駆除活動だけでなく、環境コーディネーターとして地域住民に環境のことを知ってもらう活動にも積極的に取り組んできました。地域住民の協力を得るためにも、年代や信条の違う相手に対して、どのような情報をどのようにして伝えるのかは、今後の重要な課題の一つであると感じます。

山口将典（人間関係学科 3 回生）

この活動に参加するまでは、外来魚問題に関心がなく、どのような在来魚が生息しているか分かりませんでした。先輩方に活動や魚について教えてもらうことを通して、外来魚、在来魚に対する考え方が変わってきたように思いました。この活動以外でも外来魚問題を意識できるようにしていきたいです。

山田智行（機械システム工学科 1 回生）

私が活動に参加しだしてから早くも 2 年がたち、最初の頃よりも投網の投げ方が良くなりました。先輩方に教えてもらいながら神上沼で活動することで魚類や植物などの知識を蓄えることができました。また、イベントを担当したことにより、メンバーと連携することの大切さを実感できました。

西山浩史（環境生態学科 2 回生）

地域からのコメント

にじいろ Kids　高尾裕貴子さん

7 月の水路探検イベントに参加したメンバーより、

- 生き物への関心が深まった。
- すごく良い経験だった。
- 帰宅してからセルビンをしかけに行った。 2匹の魚を捕まえることができて嬉しかった。
- 子どもたちを受け入れて下さった BASSER'S の皆さんに感謝している。
- 子どもが生き物を触った感触が印象に残ったようだ。いきいきとした顔を見ることができて参加して良かった。
- 下の妹もできるかなと心配していたが、エビを掴んでバケツに入れたり、オタマジャクシを触らせてもらったり、幼児でもすごく楽しめたし、その子どもの姿に驚いた。このような機会に感謝している。

というメッセージがありました。皆さんのお人柄、そして活動への熱意が伝わり、皆が楽しく過ごせたことに心から感謝しております。我が家でも、生き物についていろいろと感心ごとが増え、おかげさまで夏休みの楽しみがたくさん増えました。ありがとうございました。

指導教員より

環境科学部　浦部美佐子

本年度は、新メンバーへの引き継ぎが本格化した年だったと思います。これは学生団体ならではの問題ですが、新メンバーは過去の活動から得られた課題を十分に議論・検討しつつ、自分たちが主体となって新しいアクションが起こせるよう、頑張ってください。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**

神上沼外来魚駆除

滋賀県立 BASSER'S 2015 年度 活動報告書

07 フラワーエネルギー「なの・わり」

植物でエコな活動しませんか？

植物を用いた資源循環型社会の形成を目標として、休耕田や工学部棟の空き地を利用して菜の花およびひまわりの栽培し、そこから油を搾りだして燃料を生産します。また、小学生を対象としたエネルギーに関する授業も行っています。

TEAM DATA

チーム名： フラワーエネルギー「なの・わり」
代 表 者： 岩井慎吾（工学部）
メンバー数： 13名
指導教員： 山根浩二、河﨑澄（工学部）
活動場所： 彦根市内
関係団体： 非営利法人菜の花プロジェクトネットワーク
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24 H25 H26

PROJECT 実施事業

(1) 菜の花・ひまわり栽培

菜の花の唐箕作業 (07/15)

★見出し写真：ひまわり畑 (08/19)

(2) 小学校出前授業

平田小学校出前授業 (06/25)

(3) 高大連携授業

(4) イベント

・豊郷小学校、日栄小学校の三年生の交流会 (07/17)
・上岡部の地蔵盆（08/22）
・三津町町民フェスタ（10/22） 等

(5) 地域活動

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

今年は、ひまわりの品種変更と支柱設置のおかげで去年より多くの油を得ることができました。しかし、菜の花の方は、毎年同じ品種を使用していることが原因で連作障害を生じてしまい、あまり収穫することができませんでした。畑の世話が不定期になりがちであったことも収穫率低下の原因の一つだと思いました。このことから、次の栽培からは品種を変えて行い、水やりや肥料、草刈りなど定期的にしっかり行う必要があると思いました。また、油から燃料にした後の使い道が少ないので今後はもっと積極的に作った燃料を利用する必要があると感じました。

小学校での出前授業では、子どもたちに授業や実験を楽しんでもらえ、地球温暖化やエネルギーについて理解を深めてもらえたと思います。しかし、実験をもっとしたいという意欲的な子どもが多かったので、次からは実験を増やすなどの工夫が必要だと感じました。高大連携授業では、バイオディーゼル燃料とエンジンの仕組みについて知ってもらうことができました。バイオディーゼルカートが不調で走行体験ができなかったので、今後はそのようなことがないよう改良したいと思います。

今年は、地域のイベントや他団体との活動が多く、たくさんの方と交流することができました。また、三津町で広報誌を作成し、配布することにより三津町の方々になの・わりの活動を知ってもらうことができました。しかし、子どもたちに実験してもらうイベントで、実験の材料が足りないなどの不手際が目立つところもあり、もっと十分時間をかけて準備をしないといけないと思いました。今後も三津町や地域の方、他団体との交流を積極的に行って、なの・わりの活動を広めることで資源循環型社会について多くの方に理解を深めてもらえるよう活動していきます。

活動を通して学んだこと

今年は、豊郷町での交流会や上岡部町での地蔵盆など他団体の方とイベントをする機会が多くありました。しかし、劇の練習不足や実験の準備不足などが目立つ部分があったので他団体やメンバー間の打ち合わせ、実験の準備をもっとしっかりしてイベントを行う必要があると感じました。

岩井慎吾（機械システム工学科 4 回生）

一年間を通して畑仕事や小学校での出前授業など、貴重な経験ができてよかったです。自分たちで菜の花やひまわりを育て、油を燃料に変えるという作業を行うことで、バイオディーゼルについて学ぶことができました。また、出前授業では子どもたちと一緒に環境問題について考えることができました。

土田泰輔（機械システム工学科 4 回生）

今まで畑作業や唐箕、搾油等をする機会がほとんどなかったので、新しい発見の連続でした。刈っても刈っても生えてくる雑草の生命力や使用する肥料の量、搾油の方法等には驚きました。また、小学校で出前授業を行った際には、小学生が楽しそうに実験に取り組んでいる姿が印象的でした。

松吉孝明（機械システム工学科 4 回生）

今年、様々な地域との交流をしていく中で、「何かをしているのは知っていたけれど、はじめてその内容がわかった」という声が多くあった。その後，活動の内容を理解してもらうことでアドバイスなど頂くことができ、地域との繋がりの大切さを学ぶことができた.

蓼川勇生（機械システム工学科 4 回生）

地域からのコメント

畑の所有者　吉島利博さん

1 年間活動お疲れ様でした。

まず、1 つ目に「なの・わり」では、出来た作物を販売するわけではなく、搾油し食用油として、てんぷらを揚げたりされると聞いていますが、毎年、目標収穫量が決められていないために、除草作業等があまりできていない時期がありました。そこで、耕作者の気持ちを一層集中させるためには、目標収穫量を決めて作付けするといいと思います。

次に、昨年は町民フェスタに参加していただいてありがとうございました。「なの・わり」のことを町民の方にも知っていただけたと思います。今年もぜひ参加していただきたいです。

最後に、広報誌『なのわりだより』は町民の皆さんからも好評でしたので、是非、今年も発行してください.

指導教員より

工学部　山根浩二

「なの・わり」になって 2 年目となりますが、「菜の花エネルギー」の時から行っている事業は充実しているように思います。ただ、本年度は、地域の方から借りていた畑で、せっかく実った菜の花が、地域の方同士の連絡ミスで大半を雑草とともに勘違いで刈り取られた事件がありました。原因の一つには、雑草刈りが手薄になってしまったこともあると思いますので、今後は、この辺も気をつけて行きましょう。ひまわりの栽培・収穫・搾油については、昨年の失敗例も踏まえて、本年度はうまくできたと思いますので、これを維持できるように後輩たちにも伝承していってください。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**

ひまわり油

なのわりだより

08 障がい児・者、自立支援・共生社会プロジェクト

「無理なく・楽しく」がモットー！

ボランティアサークル Harmony は障がいを有する人と学生が互いに成長することを目的に、NPO 法人障害者の就労と余暇を考える会メロディーの支援活動を行っています。また活動を通じて、障がい児・者を支える地域づくりの推進も目指します。

TEAM DATA

チーム名： ボランティアサークル Harmony
代 表 者： 鈴木万璃（人間文化学部）
メンバー数： 29 名
指導教員： 竹下秀子、杉浦由香里（人間文化学部）
活動場所： 学内、滋賀県内
関係団体： NPO 法人障害者の就労と余暇を考える会メロディー
近江楽座活動年度： H16 (H17) H18 H19 H20 (H21) H22 H23 H24 H25 H26

PROJECT **実施事業**

(1) 定例活動

定例活動　油絵（09/26）

(2) 宿泊体験
★見出し写真：宿泊体験　水遊び（08/08）

(3) クリスマスコンサート

クリスマスコンサート（11/28）

(4) おとくら展示会

(5) カヌー体験

(6) 「愛荘66かまど祭」出店

(7) 芋ほり体験

(8) 定例会議

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度の活動を企画するにあたって、前年度の活動内容を参考にし、Harmony 主体で行ったことで、メロディさんの負担を軽減できたと思います。加えて、継続して活動を行い続けることに重点を置き、次回改善すべき内容を活動後に伝えるなど、学生間で積極的に連絡を取り合いながら活動できました。定例活動の一環の油絵では、子どもたちは落ち着いて席に座って活動してくれました。色使いも単色から混ぜ合わせた色を使ってくれることが多くなり、これまでの活動がしっかりと成果をあげていたことを実感できました。お茶の席でも、作法をある程度理解してくれているようで、茶室に入ると大きな声を出すことなく座ってくれる子どもが増えました。夏のお泊り会でも、学生が自ら企画したスケジュールで活動を行い、川遊びやスイカ割りを子どもたちに楽しんでもらえました。普段の活動は数時間で終わりですが、宿泊体験は長時間続くために途中で飽きて突然泣き出す子どももいました。前年度は食事の準備を保護者の方に任せすぎているように思ったので、今年は子どもたちと学生が協力して楽しんで準備することにより、お互いに距離感を縮めていけたと思いました。

課題として、映像や画像といった記録媒体の確認、それを踏まえた上での反省が十分ではなかったことが挙げられます。主観ではなく客観的に自分たちの活動を見返せるので、新たな反省点が見つかる可能性があります。また、部員同士の意見交換が円滑にできていないように感じます。メロディさんは、学生が創意工夫して成長できるように、アドバイスは敢えてしないようにされています。だからこそ、誰もがしっかりと自分の意思を持ち、先輩後輩の関係を超えて、仲間として意見を出し合えるような雰囲気を作り上げることも、これからの課題です。

活動を通して学んだこと

私は、この活動は子どもたちも私たち大学生も成長することができる活動だと感じました。ボランティアというと「支援する側」と「支援される側」がいると想像していましたが、子どもたちと共に遊び、共に楽しむ事を経験し、人には一方通行の関係はなく、互いに繋がり合っているということを学びました。

福永治佳（人間関係学科 1 回生）

障がいを持つ子と接したいという思いで Harmony に入りました。最初は慣れずに苦労した点も多くありましたが、先輩や大人の方たちの助けもあり、今では彼らと一緒に楽しみながら油絵やお茶などの活動をしています。限られた活動の時間の中で、これからも彼らのことを見守り、たくさん知っていきたいです。

安延美亜（人間関係学科 1 回生）

当初は障害のある子どもとの距離の取り方などわからないことばかりでしたが、子どもと一緒に活動していくうちに接し方などがだんだんわかってきました。子どもが楽しんでくれるだけでなく、自分自身も楽しんで活動に参加することがより良い活動をしていくうえで大切になるのかなと感じます。

吉原朱音（人間関係学科 1 回生）

はじめは、障がいを持った子どもと接したことがなかったので、どう接したらいいのかわからず不安でした。しかし、子どもたちと接しているうちにそれぞれの個性がわかってきて、子どもたちと活動することの楽しさを知りました。

長村優香（人間関係学科 1 回生）

地域からのコメント　（抜粋）

NPO 法人障害者の就労と余暇を考える会メロディ　田井中雅子さん

障害者の余暇と就労を考える会メロディーの活動を通して、ハーモニーには大変お世話になっています。息子が小学校 2 年生の時からのお付き合いで、8 年間の長いお付き合いになります。中学校卒業間近になった今では、人が自分に伝えようとしていることをわからなくても理解しようと努めている姿が見て取れるようになりました。一人一人にあったハーモニーの学生さんの対応のお陰で、少しずつではありますが、本当に順調に成長してきていると感じています。

また、毎年メロディーと共催で開催しているクリスマスコンサートにおいては、最近ではハーモニーが主体となってより皆さんに楽しんでもらおうと企画してくれ、年々内容も充実し広く地域に親しまれてきています。昨年、出演してくれている吹奏楽部の学生さんとお話させてもらう機会があったのですが、「このコンサートのお客さんは素直に声援を送ってくれたり、踊ってくれたりするので、喜んでくれているのが実感できて演奏していて楽しいです。」と言ってくれました。この子たちの良さに気付いてくれる人が、また一人増えたことにうれしく思い、ハーモニーの活動の無限の可能性を感じました。

指導教員より　（抜粋）　人間文化学部　竹下秀子

これまでの実績を活かしつつ、新しいとりくみに挑戦することができた。「子どもたちが活動を楽しみ、重い自閉症などの障がいを有しつつも他者とかかわり、他者に心身を協調させる力を発達させていく姿を保護者や地域の支援者とともに学生が見守り、その成長・発達を確認して進めていること」が Harmony の活動の何よりもユニークで優れた特徴であり、今年度もこの点において本プロジェクトを高く評価できる。

さまざまに不充分なところ、未熟なところがあるにしても、多くの学生が子どもたちや保護者の皆さんと集い、互いの意欲や感性に触れ合う経験のあるところにこそ、新たな価値も生まれて共有されていく。今後も元気よく活動し、新しい仲間を多く迎えて前進するプロジェクトであることを期待する。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**

おとくら展示会ポスター

クリスマスコンサートチラシ

クリスマスコンサートパンフレット

09 人と環境を救う雨水タンク

住まいのそばに、いつも小さな琵琶湖。

廃プラからリサイクルプランターを製造・販売する活動を行ってきました。今年度より雨水タンクに着目し廃プラ削減と水資源の有効利用を目指しています。企業や就労支援施設と連携したhana-wa 活動や地域清掃活動にも参加しています。

TEAM DATA

チーム名： 廃棄物バスターズ
代 表 者： 山花広樹（工学研究科）
メンバー数： 16 名
指導教員： 徳満勝久（工学部）
活動場所： 彦根市内、大津市
関係団体： コダマ樹脂工業株式会社　他
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24 H25 H26

PROJECT　**実施事業**

(1)　雨水タンク作成

雨水タンク実験　(11/14)

(2)　hana-wa 活動
★見出し写真：hana-wa 活動　(04/01)

(3)　荒神山清掃

宇曽川清掃 (05/06)

(4)　HIKONE キレイ隊

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）

メインプロジェクトである雨水タンクについては、結果的に雨水タンク作成までには至りませんでした。しかし、コダマ樹脂株式会社の協力のもと、小さな容器の試作には成功し、雨水タンク作成の可能性が出てきました。また、学内でも実験を行っており、雨水タンクに適した材料の研究も順調に進んでいます。来年度は、雨水タンク作成を本格化するとともに、今年度行くことができなかった工場見学にも行きたいと考えています。

hana-wa 活動の反省点は、昨年度と比較して参加回数が少なかったことです。hana-wa 活動は廃棄物バスターズが発足したときから行っている活動であるため、もっと積極的に参加していくべきであったと思いました。リサイクルプランターの研究については、協力していただいている上西産業株式会社から数種類の廃棄プラスチックを輸送していただき、それをもとに物性の評価を行いました。その結果を上西産業株式会社の方と共有し、より良い製品を作っていくことに貢献しています。

その他の彦根デザイン・カレッジとの共同事業については、荒神山周辺の清掃、ワークショップへの参加、枯れ松伐採など積極的に参加をしました。その結果、他団体とのつながりが広がり、廃棄物バスターズについて知ってもらうことができました。来年度も積極的にイベントに参加し、廃棄物バスターズについて知ってもらいつつ、地域貢献に努めていきたいと考えています。また、HIKONE キレイキャンペーン隊についても、毎年同様月に 2 回の彦根市役所周りの清掃活動、よさこい祭りの警備、ゆるキャラ祭りのお手伝い等の活動を行い、地域の方々と協力し、地元の美化にも貢献できました。

活動を通して学んだこと

雨水タンクに関しては無事試作が終わったものの、まだ課題は多く、モノづくりの難しさを改めて痛感した。また、今回新たに荒神山での清掃活動に参加し、表向きには見えない様々な問題があることを知った。これらを地元の人々と協力し解決することにより、地域活性化がより加速されると感じた。

山花広樹（工学研究科材料科学専攻 1 回生）

昨年の活動と違い近江楽座に加入し、そこで情報の交換や意見を聞いたりして今まで自分たちが気づかなかった観点や行動を知ることができた。また、今年度は複数の事業を並行して行っていたため一つ一つの事業の活動が疎かになっていることが多く、事業を運営していく難しさと計画性の大切さを感じた。

稲畑哲（工学研究科材料科学専攻 1 回生）

雨水タンクによって、廃プラと水資源に関する意識を地域の方に持ってもらえるまでには至らなかったが、雨水タンクの製造の可能性を感じたことは来年度に繋がる一番の収穫であった。また、私たちと同様に環境に関心のある方々と清掃活動等を行う機会に恵まれ、環境保全の必要性を改めて感じた。

園田浩平（工学研究科材料科学専攻 1 回生）

地域からのコメント　（抜粋）

社会福祉法人いしづみ会障害福祉サービス事業所いしづみの家
職業指導員　西村隆志さん

廃棄物バスターズと PCR（ペットボトルキャップリサイクル）作業所連絡会の協働活動も早いもので 6 年が経過しました。名神高速道路の菩提寺 PA・大津 SA の定期メンテナンスに PCR の各作業所の利用者(障害のある方）と共に参加し、利用者と仲良くコミュニケーションをとってもらいながら花の手入れをする作業に例年関わってもらっています。利用者の社会性を養うという点について各作業所としても課題に上げていますので、公共の場所に出てお客さん・バスターズのメンバーと会話・挨拶をすることはとても重要です。利用者の方々も楽しみにしているのでバスターズの参加協力は助かっています。

HIKONE キレイキャンペーン隊 事務局長　馬場和子さん

毎月の定例活動、駅前と旧港湾一帯のごみ拾い。決して格好よい訳ではありませんが、メンバーは真摯に取り組んでくださっています。その他にも、「ゆるキャラまつり」では会場内のごみのことならお任せ！！と、キレイブースを設け分別を啓発するだけでなく、自らがごみを拾って歩く。遠来の皆さんが彦根での時間を気持ちよく過ごしていただくために。メンバー皆さんの小さな気遣いや気持ちの在り様は素晴らしく、彦根の元気を創ってくださっているのだと思っています。

指導教員より（抜粋）　　工学部　徳満勝久

本年度より、廃棄物バスターズが近江楽座に再参画した。本団体独自の事業を引き継ぐと同時に、新たな取り組みとして「地域分散型治水ダム」と銘打った取り組みを開始し、その目途が漸く立ったという印象である。廃棄物バスターズは今まで数々の学生・ビジネスコンテスト、環境コンテスト等で多くの賞を受賞し、〝目立つ活動〟ばかりが目を引いてきた感もあるが、実際には〝目立たない活動・地道な研究〟を粛々と行う世代の努力があっての成果であった。本年度は次年度に繋がる〝目立たないが次の芽を育てる〟活動の年次に相当するものであり、来年度にそれを実際の〝芽〟に育ててくれるものと期待している。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**

雨水タンク試作物

10 信・楽・人 -shigaraki field gallery project-

信楽の隠れた良さを再発見！

信楽町長野地区、信楽焼を製造している窯元が多数ある窯元散策路と呼ばれる焼き物のまちで、改修作業や散策路の問題解決、イベントの参加、企画など、ここでしかできないことを学生自らが提案し活動している。

TEAM DATA

チーム名： 信・楽・人 -shigaraki field gallery project-
代 表 者： 中道千尋（人間文化学部）
メンバー数： 7名
指導教員： 印南比呂志（人間文化学部）
活動場所： 甲賀市信楽町
関係団体： 信楽窯元散策路の WA
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24 H25 H26

PROJECT 実施事業

(1) キャンドルホルダー作り

(2) 藤喜陶苑改装

解体作業 (07/12)

(3) UCC コラボ企画
★見出し写真：完成して展示された商品 (03/09)

(4) ぶらり窯元めぐりイベントスタッフ

(5) 常滑研修

常滑研修 (08/30)

(6) ベルロードイベント参加

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

4月は、信楽で毎年開催されるぶらり窯元めぐりに参加した。窯元で陶ビーズの製作をさせていただき、当日は、インフォメーションとしての役割を全うした。6月には、あかりんちゅに信楽に来てもらい、信楽焼のキャンドルホルダーを製作した。信楽焼には、光が透ける陶器があり、その土を用いてキャンドルホルダーを作った。作った10個のキャンドルホルダーはあかりんちゅに寄贈しており、今後のあかりんちゅの活動に使用してもらう予定である。8月は、信楽人の新たな試みとして、信楽焼の元となる常滑焼の産地に赴き、焼物について学ぶ研修を行った。同じ焼物の産地でも街並みに違いが表れており、現在の窯元散策路を俯瞰的にみる材料の一つとなった。

7～10月には、使われていない建物である「藤喜陶苑」の解体、改装を行った。信楽人のメンバーだけではなく、環境建築デザイン学科の学生や川井先生、OBの方に協力してもらった。多くの学生に参加してもらうことができ、学生が信楽に目を向けるきっかけになったと思う。10月17～18日に改装した場所でイベントが開催され、信楽人もスタッフとして参加した。今後も改装した「藤喜陶苑」を活用していく予定である。

そして、何年も前から継続してきたUCCコラボ企画だが、12月に話がまとまり、3月にUCC滋賀工場でディスプレイされ完成となった。コラボ商品は「NETSU」という名前で展示されている。信楽人は、コーヒー灰を用いた商品のアイデアやポスター、説明書きを掲載したDMなどを製作した。

昨年と比較して、今年は改装などのハード面のプロジェクトを行った。少人数ではあるが、メンバー以外の学生も巻き込んで信楽で活動をおこなうことで、滋賀の特産品の信楽焼を知ってもらうきっかけになったと思う。また、長年行ってきたUCCコラボ企画が完成したことは、信楽人の大きな成果となった。

活動を通して学んだこと

人数が減った中で改装をやることに対し不安もありましたが、無事完成できてよかったです。今年のプロジェクトは、多くの人の協力なしではできなかったことばかりです。人との繋がりの大切さが身にしみました。

中道千尋（生活デザイン学科３回生）

今年度の活動として、ギャラリーの改修作業を行ったのが一番印象的でした。建築学科と協力して、泊まり込みで一日中作業をしたのは大変でしたが、ギャラリーが完成していくのを間近で感じられて良い経験になりました。イベントでは地域の方とも交流ができ、信楽の良さを改めて感じることができました。

古長美蘭（生活デザイン学科２回生）

地域での活動は信楽人に参加する前も多少行っていましたが、一つの地域で継続的に活動するのは信楽が初めてでした。何度か足を運んでいると、一度来ただけではわからないことが多くあるのだと勉強になりました。

前川瑛美梨（生活デザイン学科３回生）

地域からのコメント　（抜粋）

株式会社谷寛窯 代表　谷井 芳山さん

谷寛窯では、昨年に引き続き、UCC の商品開発に関わっていただきました。商品が具体的に成ってきてからは、パッケージデザインや取り扱い説明等細かなところまで話し合いを通じて深めてゆくことが出来ました。特に開発商品のコンセプトを決め、ネーミングをつけた事が印象に残っております。それは NETSU(熱)、全ての営みの中で「熱」という思いが込められていて、皆の中から共有出来る想いが言葉となり文章と成って誕生致しました。この NETSU の一文字ずつにも、驚嘆に値する意味が偶然にも潜んでおりました。それは、N は NEVER、E は ENDING、T は TANIKANGAMA、S は SHIGARAKI、U は UCC。そうして UCC 滋賀工場の担当者とも幾度も打ち合わせ会議を進めていき、この度晴れて、NETSU の商品が納品出来る運びとなりました。

メンバーの皆さんには、この企画を進めて行く最中、いろいろな想いや意見があったと思います。これから就職活動に入られる方やご卒業され就職されるメンバーの方々には、今回の経験が少しでもお役に立てられますように願ってやみません。社会に出て、色々な厳しい体験をされる事に直面する事も多々有ると想いますが、社会人として、また一人の人間として、多くの人々との関わりの中で、響き合い支え合う大きな心の持ち主に成長されます様に希います。

指導教員より　人間文化学部　印南比呂志

今年の活動は多岐に渡っていた。これまではイベントへの支援やまちなかでの環境活動が中心であったが、信楽のまちとのつながりが日常化してきたように感じられる。これが望んでいたことであり、地域の一員となって活動が必然化してきた証ではないだろうか。空き店舗のリノベーションプロジェクトへの参画や、企業と窯元をつなぐ商品開発、他の産地への研修など、独自の地域活動が増えてきた。これは、彼らの地域活動が受け身の姿勢から積極的に自立し始めたことを表している。地域への支援、参加から、日常的に行動できるイニシアティブをとれる活動となりつつある。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**

透ける陶器のキャンドルホルダー

UCC コラボ企画 ポスター３種

<その他成果物>
藤喜陶苑改装

11 木興プロジェクト

ものつくりによる復興支援

東日本大震災を受けて、滋賀県立大学の建築デザイン、生活デザインの学生による震災復興プロジェクト。建築・デザインを学ぶ私たちに何ができるのか、何かしなければという思いをきっかけに、ものづくりによる復興支援を目的としている。

TEAM DATA

チーム名： 木興プロジェクト
代 表 者： 北口智貴（環境科学研究科）
メンバー数： 22 名
指導教員： ヒメネス・J・R、川井操（環境科学部）
活動場所： 宮城県南三陸町歌津地区田の浦
関係団体： 田の浦ファンクラブ
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 **H23** **H24** **H25** **H26**

PROJECT **実施事業**

(1) 田の浦訪問

(2) サマースクール
★見出し写真：サマースクール (09/09)

サマースクール (09/04)

(3) スプリングスクール

(4) 防災かまどベンチ

(5) 玉川小学校「命の学習」

命の学習 (01/26)

(6) プレ木、道具講習

(7) 3.11 キャンドルナイト参加

(8) 海の運動会参加

(9) 定例ミーティング

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）

ものづくりでの復興支援を目的としてきたが、高台造成や防潮堤の建設計画など行政の手が届くようになってきた。関わり始めた頃とは違う景色の田の浦を見て、現地の方の声を聞いて木興プロジェクトの活動について考えることを迫られる一年であった。

昨年度でニューたのうらセンターは建物として一通りの機能が備わった。これによりプロジェクトとしては、ハードによる支援は一区切りと考えていたが、メンバーの代替わり、新たなヒアリング、提案を通してもう少しできることがあるのでは考え、活動を行っていった。そういう姿勢もあってか、田の浦の方からはまた制作物の依頼も出てきた。依頼の内容は、被災によって失われたものであったり、新しい家に作って欲しいものであったり様々である。

目に見えて必要なもの、支援すべきものは減ってきたかもしれないが、被災した人の状況も5年目を過ぎて変わっくることもあり、これからは地域が抱える問題として、外からは見えにくいものやことが出てくる。これらを解決できるの可能性を木興プロジェクトは持っているのではないだろうか。

滋賀県内での活動では、今年度も玉川小学校での防災学習に参加することで被災地と滋賀をつなげることができた。田の浦の方の話、木興プロジェクトの話を聞く小学生達の眼差しは真剣であった。小学校としても今後もこの繋がりを続けたいということで、来年度の要望もいただいた。

今年度は木興プロジェクトの活動のアウトプットをこれまで以上に行うことを目標とし、SNS の更新や制作物に気を付けてきたが、まだ足りないとも感じる。そのようなことも踏まえ、アウトプットすることによる相対化、メンバー間での情報、思いの共有、制作物のレベルアップが今後も必要である。

活動を通して学んだこと

今年度で震災から 5 年が経ち、被災地の変化を感じた。現在の活動の根本である復興ということを新たに見直すべき節目にある年だったと思う。その中で強く感じたことは、過去を知り現在何をすべきか考える、ということだ。過去の先輩方は何を考えていたか、それらを踏まえた上で活動するべきだと思う。

萩崎敬太（環境建築デザイン学科 3 回生）

県大に入学して初めての 1 年間はほとんど楽座と共にありました。個性的な先輩方や地域の方々の熱い思いを聞き、大切なことは自分がその地域が好きかどうかだと気が付きました。好きだから関わろうと思える、自分にできることがないかと考えられる。これからも好きの気持ちで関わりたいと思います。

高田拓夢（環境建築デザイン学科 1 回生）

活動を通して田の浦の人々と関わる中で、学生の私たちが今すべきことは何なのかを考え、それを計画・実行するという流れを経験することができた。意味のある活動をするためには積極的に行動することが必要で、それを知ることができたのはこの活動のおかげだ。今後もそのことを忘れず活動していきたい。

西川夏生（環境建築デザイン学科 2 回生）

ものづくりだけでなくイベントを通して田の浦の方々とお話しする機会が多くあり、信頼関係が築けてきたのではないかと思う。震災復興支援は続くが、わたしたちの関わり方は少しずつ変わっていく。田の浦という地域と人に愛着を持ち、一緒になって復興を手伝い、見守れる関係が続けられることを望む。

宮本佳奈（環境建築デザイン学科 3 回生）

地域からのコメント

漁師　千葉吉典 さん

流された神社の鳥居をつくって欲しい。自分たちは忙しくてなかなか手をつけられない。今までこうやってやってきたこともあるし、是非木興プロジェクトにやって欲しい。そしたら昇一郎さん (神社の側に住む漁師さん) も喜ぶと思うんだ。

仮設住宅から高台の新居に移られる　金野安美 さん

高台に新しく集会所はできる。でもそこは契約会の管理だし、高台以外に住む人は使いにくい。この集会所 (ニューたのうらセンター) で今後もおちゃっこ会はすると思うよ。ここが無かったらと考えると怖い。

近くに住むおばあちゃん　やえこ さん

こっちに (ガーデン) にも座るとこができたんか。暖かくなると座れるねえ。

指導教員より

環境科学部　ヒメネス・J・R

田の浦と滋賀県立大学が関係を持ち始め、2015 年度で 5 年が経過した。その間に木興プロジェクトがデザイン、施工、改修したニューたのうらセンターは、お互いを繋ぐ基盤となり、田の浦の集落と学生の関係はより強くなってきている。

田の浦での今年度の目標は、両者の関係の強化と改善に置かれている。

5 年間の共通体験を踏まえ、田の浦と滋賀県立大学は、次の 5 年間も固い絆で結ばれるだろう。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**

ニューたのうらガーデン

木興プロジェクト紹介ボード

＜その他成果物＞
木匠塾報告書
ベンチ、屋根
センターのメンテナンス
倉庫
海の運動会　横断幕・エンブレム・ポスター、チラシ

12 たけとも（竹の会所・友の会）

竹で地域と繋がる

宮城県気仙沼市に復興の拠点となる場所を作りたい。滋賀県立大学陶器研究室が中心となって始動した「竹の会所」プロジェクトです。そして竹の会所の今後を支えていく友の会、それがたけともです。祭りや補修 WS を通して地域と交流しています。

TEAM DATA

チーム名： たけとも（竹の会所　友の会）
代 表 者： 大野宏（環境科学研究科）
メンバー数： 28 名
指導教員： 陶器浩一、永井拓生（環境科学部）
活動場所： 宮城県気仙沼市
関係団体： 株式会社高橋工業
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 **H24** **H25** **H26**

PROJECT **実施事業**

(1) たけとも春祭りワークショップ
★見出し写真：春祭り　ヒアリング (05/05)

(2) たけとも夏祭りワークショップ

「竹の会所」補修　(10/18)

(3) 補修ワークショップ

(4) 「竹の庭」補修ワークショップ

竹の庭 補修　(03/13)

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）

「節目の年」

今年度は、竹の会所を建設した当時のメンバーが一人しかおらず、その当時の緊迫感や感じたものなど、作業面も含めうまく受け継げているのだろうかと、考えながら始まった年であった。それとともに仮設建築の４年という節目の年であり、竹の会所をどうしていくのか、春のワークショップでは、ヒアリングを行ったりと自分たちで考えながら活動を行ってきた。滋賀、大学で考えていてもわからなかったが、気仙沼に行くとその答えはあった様に思う。まだ虎舞の練習をする場所ができていないこと、そして子どもたちが竹の会所で走り周り遊ぶ姿を見て、学生たちも継続に向けて頑張ろうと思えたのではないかと感じた。

去年から、来年は節目の年だ、建設当時のメンバーがいなくなるから受け継ぎが大変だ、と言われてきた。メンバーの多くが1、２回生であり、受け継いでいくにはやはり言葉と自分で感じとってもらうことでもあるなと思った。今年度は、ヒアリングをしたり、建設当時の先輩方が参加してくれたり、復興の話をトークショーという形で聞くことができたことが成果だと言えるだろう。どう受け継いでいくか、悩んでいた上回生も、地元の方や先輩の話を聞くことで、気持ちが楽になったと感じた。今年度参加してくれた、一人ひとりは何かしらを感じてくれたと思う。これこそが今年の成果であると思う。

今後もこの感じたものを技術とともに受け継いでいくことが課題だといえるだろう。

活動を通して学んだこと

建築の在る意味を考える。私がこの活動で学んだことである。建築によって場に人の集まりを作り地域に活力を与え、それが個人の活力となる。また建設に携わった人それぞれの思いと、これまでこの場所に存在し関わったすべての人やものがってこその今の竹の会所である。

大橋あかり（環境建築デザイン学科１回生）

今まで体験したことがない様々な経験ができました。実際に行ってみないとわからない被災地の現状を見たり、地域の人達とふれ合い、とても貴重なお話も聞けたりしました。作業では、珍しい竹を使っての建物の修繕に携わらせてもらい、自分の建築の世界が広がりました。

北島真吾（環境建築デザイン学科１回生）

夏のワークショップには先代の先輩方から話を伺うことができました。当時の被災地の状況やどんな思いでこの活動に携わっていたのか、少しでも当時の想いを知ることができてよかったです。大学の活動ならではの縦の繋がりで想いを継承すること、現地で実際に活動する事の重要さを学びました。

本田山成昭（環境建築デザイン学科１回生）

地域からのコメント　（抜粋）

（株）高橋工業 代表取締役　高橋和志さん

たけともの学生たちが築いてくれた竹の会所は、主に地域の伝統芸能である平磯虎舞の練習場所として、日常的に利用させていただいている。

毎年春と秋には陶器浩一研究室とたけともメンバーの学生たちが訪れてくれ、地域の子供たちとの交流活動（たけとも祭り）や建物点検と補修、大掃除を行ってくれている。

今では地域の子どもとすっかり顔なじみになり、子どもたちも学生たちが来るのをいつも心待ちにしている。震災により全てが失われた中で築かれたこの場所で、虎舞を継続することができた。いったんは休止した練習を竹の会所ができたことにより再開でき、地域の子どもたちが希望を持つことに弾みがついた。

震災前の２倍の子どもたちが練習に参加するようになって、以前にも増して活気が戻り、震災後の継続した活動に対して、文化庁から民俗芸能保存に寄与したことが評価され表彰を受けるとともに、各種イベントに参加して平磯虎舞を披露している。

毎年訪れてくれる学生たちの元気な姿は地域を元気づけてくれる。

指導教員より　（抜粋）

環境科学部　陶器浩一

「子どもたちや孫たちに胸を張って残せる地元を作りたい。が、集まって話す場所もない」という声を聞き、私たちにできる事は何かと悩みながらこのプロジェクトを決意した。

４年が経過し、地域の状況もたけともの役割も当初思っていたことと違ってきていると感じている。当初、「集会所に変わる施設」（＝モノ）の建設活動で始めた活動だが、ここで行われる“コト”、さらにはここから生まれる“ヒト”（人と人との関係）が地域に求められているように感じている。

「震災の記憶の継承」「地域コミュニティの継承」「竹建築技術の継承発展」のため、笑顔の集まる、未来に続く場所として、この活動が継続してゆくことを願っている。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**

春祭り　チラシ

夏祭り　チラシ

13 おとくらプロジェクト

高宮に新しい風を吹かせよう！

滋賀県彦根市高宮町で、築 200 年の古民家を学生が改修してできた高宮町のコミュニティスペース「喫茶おとくら」の運営を中心に、地域活動への参加、イベントなどを行う、高宮の地域活性化を目的とする団体である。

TEAM DATA

チーム名： おとくらプロジェクト
代 表 者： 村尾采佳（人間文化学部）
メンバー数： 24 名
指導教員： 迫田正美（環境科学部）
活動場所： 彦根市高宮町　座・楽庵「喫茶おとくら」
関係団体： 高宮経友会
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24 H25 H26

PROJECT 実施事業

(1) イベント活動
★見出し写真：中嶋俊晴、佐渡春菜コンサート「優しい時間 vol.3」の受付の様子 (07/19)

(2) ギャラリー活動

2 月ギャラリー　生活デザイン学科湖風祭ファッションショー (2 月)

(3) 喫茶活動

(4) 座・ギャラリー活動

(5) 広報活動

(6) 高宮小学校ビックアート

(7) 研修旅行

カッフェ製作委員会（関西学院大学所属）を訪問 (03/10)

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度は、イベントとギャラリーでの活動が大きく飛躍したと感じる。メンバーが積極的に学生に働きかけただけでなく、イベントの恒例化も可能になってきたため、昨年度と比べてもイベントが充実してきた。おとくら通信の効果もあり、イベント等をきっかけにおとくらへ足を運んでくれる地域の方が増えた。また、学生がイベントやギャラリーを主催することで、主催関係者だけではない学生や地域の若い人たちの来訪も増え、来訪者の「ここで私たちも何かしたい」という声に繋がりを実感できた。

そして、今年度の最も大きな成果と言えるのが座・ギャラリーの開設である。座・楽庵とは別の場所に設立されており、座・楽庵を通り過ぎても、座・ギャラリーに訪れることで活動を知っていただける。地域の方の声から始まった事業でもあるため、地域の方と協力して行えたと感じる部分が多く、高宮町の中に溶け込むことにもなっている。また、座・ギャラリーでは高さのある作品の展示、ギャラリー輪々では映像を用いた展示が可能になり、展示の幅を広げられたと考える。

地域の方におとくらを知ってもらうという点はクリアされてきたため、今後はどのような活動を広げるか、どのようなことをきっかけに来訪してもらうか、などが重要である。地域活性化において、地域の方や学生や訪れた方が表現する場の橋渡しとなるのはもちろん、おとくらメンバーが主となる活動をもっと増やしていきたいと感じる。高宮町に人を呼び込むためにも、同じことを繰り返すのではなく、様々な面からアプローチをしてきっかけを広げていくことも重要である。「新しい風」を吹かせ、更に地域に還元できる活動を今後も目指したい。

活動を通して学んだこと

おとくらプロジェクトの活動を通して、高宮町の地域との関わり、喫茶やギャラリーに足を運んでくださる方々とのコミュニケーションの取り方、イベント運営における裏方の大変さを学びました。また、湖風祭の模擬店の代表を務めさせていただき、メンバーをまとめること難しさややりがいを感じました。

佐草小夏（生活栄養学科 1 回生）

おとくらの特徴として、お客様等初見の方とお話が出来ることがある。大学では得られない知識を活動を通して知ることが出来ると気づいた。また、学生が地域で活動することが地域の人に喜ばれると気づいた。活性化に直接繋がることが出来なくても、私達の活動は誰かを元気に出来るのだと思った。

米山美沙紀（地域文化学科 1 回生）

おとくらプロジェクトで活動することで、いろいろな人と関わることができ、コミュニケーションが前より出来るようになったと思います。為になる話も聞くことができ、自分の将来に役に立てようと思いました。次は後輩ではなく先輩になるので頼りになれる先輩になれるよう努力していこうと思います。

柳瀬直城（環境建築デザイン学科 1 回生）

この活動ではイベントが数多く行われており、そのイベントの運営に私は従事しているのですが、そこでの段取りを経てイベント運営の難しさを痛感しました。同時にそのイベント運営が成功したときに達成感と自信を持つことができました。

西谷公佑（生物資源管理学科 1 回生）

地域からのコメント

おとくら家主　加藤義朗さん

おとくらの家主であり、自称おとくら応援隊隊長の加藤です。本当に、おとくらプロジェクトとともにいつも楽しませていただけて、感謝感謝で、いっぱいです。

今年度は、いろいろ話題たっぷり。座・ギャラリーのオープン、あぷり (代表) の魅力たっぷりのびわこテレビの放送、おとくら寄席、おとくら新ユニット誕生？ etc. 最後に、高宮小学校でのビックアートと、いろいろご苦労様でした。これからも、「継続は力なり」を合言葉に、メンバーが楽しむ事を第一に、高宮での地域貢献を楽しみにしています。

リーダーあぷりを中心に、一年間、本当にありがとう。また、奥貫先生をはじめ、おとくら応援隊の皆様、これからも、メンバーの支援よろしくお願いいたします。

指導教員より

環境科学部　迫田正美

本年度は新しい取り組みを立ち上げる一方、ギャラリーとイベントについても充実した活動が展開され、これまでの先輩が創り上げてきたものが着実に受け継がれ、そして将来の活動の方向性がメンバーのなかに実感として芽生えてきたのではないだろうか。

自主的に研修の内容や研修先を決め、実行できていることもそれぞれのメンバーにとっていい経験になっていると思う。

今後とも地域で支えていただいている人たちや、ギャラリー、コンサートに出展、出演していただいている方々とのつながりを大切にして、新たな発展を目指すことを期待する。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**

ギャラリー喫茶おとくらと思い出展について

ココア味、抹茶味のワッフル

イベント チラシ（上：寺子屋チラシ）

<その他成果物>
おとくらつうしん
ギャラリー 輪々 チラシ
座・ギャラリー チラシ

14 男鬼楽座

茅葺き民家の再生

彦根市男鬼町を中心に、山間集落を通して文化的景観資源の保存と活用を考える。毎年７月には茅葺き屋根の葺き替えイベントを開き、楽座メンバーや職人に加え多くの他大学学生・一般の方々を招いている。

TEAM DATA

チーム名： 男鬼楽座
代 表 者： 岩間奏歩（人間文化学部）
メンバー数： 30 名
指導教員： 濱﨑一志（人間文化学部）
活動場所： 彦根市男鬼町
関係団体： 東近江市役所
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24 H25 H26

PROJECT **実施事業**

(1) 男鬼地区での茅葺屋根葺き替え事業
★見出し写真：(07/20)

葺き替えイベント (07/20)

(2) 城楽邸での茅葺き屋根葺き替え事業

(3) 茅刈りイベント

茅刈りイベント (11/22)

(4) 湖風際での活動紹介ブースの出展

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）

私たち男鬼楽座は、男鬼の歴史的建造物の保存、茅葺きの技術の伝承、結システムの伝承という３つの目的を持ち１年間活動してきた。

今年度は悪天候のため葺き替えイベント初日が中止になるというハプニングがあった。屋根の補修が追いつかなかった為、来年度はこの遅れを取り戻すためにもより一層参加者を呼びこみ、活動を盛り上げていきたいと考える。少ない日程の中で、チームワークを発揮できたことはよかった。一人では出来ない作業を仲間とともに協力して行い、参加者全員がやりがいをもって活動に取り組むことが出来た。

これまでのイベントで、私たちは男鬼に残る茅葺き民家を使わせていただき葺き替えイベントを実施してきた。しかし、3月に入ってから男鬼の民家が一棟解体されてしまった。建具や襖も凝った作りで、格調も高いものであったにもかかわらず、大正末期ころの貴重な茅葺き民家が、私たちが何も知らない間に解体されてしまったのである。これからはもっと情報収集していくことが大切であると実感した。今後は更にネットワークを大事にして、地域との繋がりを大事にしていきたい。

どのイベントでも職人をお招きし、その都度、茅葺き技術を教えてもらい、実際に体感して学ぶことが出来た。しかし、簡単には職人のように作業が出来るわけではない。そのため事前に葺き替えで必要な縄結びの講習をしたり、活動の中で経験を積み、仲間とも教え合いながら活動して、少しずつ技術を習得できたと思う。そして職人から教わったことを、自分だけで留めておくのではなく、他のイベント参加者の方に教えることができた。他の参加者から自分たちの知らないことを教えてもらうこともあり、相互に技術の伝承が出来るように動けたのではないかと感じる。今後は、茅葺き民家の様々な面での活用を考えていきたい。

活動を通して学んだこと

イベントを通して、伝統的な資源を残していくことの価値を考えるようになった。新しいものだけでなく、古くからあるものに対して学生にもっと興味を持ってもらいたい。活動してきたことが地域の活性化につながると実感できるように、継続していくことが大切であると学んだ。

岩間奏歩（地域文化学科 3 回生）

多くの人を巻き込んで、イベントを実行することの大変さを知った。今後も継続して、大学生と地域が関わることのできるイベントを開催していきたい。参加者と交流できたことも、印象に残っている。

内島大貴（地域文化学科 3 回生）

イベントの主催にあたり、責任感を持って取り組むことの大切さを学んだ。これからも参加してもらえるように内容を見直しながら、多くの人を巻き込めるイベントを開催していきたいと思う。

西谷実咲（地域文化学科 3 回生）

地域に関わることができて、良い経験になった。限界集落が抱える課題を考えるきっかけにもなり、これからもこうした地域に関わるイベントに積極的に参加していきたいと思っている。

大川直也（地域文化学科 3 回生）

地域からのコメント（抜粋）

城楽邸家主　城楽直さん

男鬼楽座のみなさんに葺き替えを手伝っていただいているのは、築 150 年以上の余呉型古民家です。人の出入りのないまま放置されたような空き家ですから、人が住んでいる家と比べて何倍もの早さで劣化が進んでいたと思います。かといって改修する余裕はなし…。

そんな時、県立大学の濱崎先生にお出会いする機会があり、相談にのっていただきました。湖北古民家再生ネットワークやいざない湖北の皆さんとつないでくださり、早速「古民家再生塾」という形で毎年多くの方に出入りしていただき、改修作業がはじまりました。

見向きもしなかった茅の葺き替え作業、学生さんたちに混じりながら作業することで私も楽しみながら作業することが出来ました。空き家に人が出入りするようになって、活気づいている様子を見ることが出来て嬉しかったです。イベントを通して、また私どもの古民家に関わってくださるようお願いします。

指導教員より

人間文化学部　濱﨑一志

男鬼楽座の活動における「結い」の復活という大きな課題への道のりは険しい。そもそも「結い」とは地域社会の小さな集団の中で、生活の営みを維持していくために共同作業をおこなうこと、もしくはそのための相互扶助組織、いわゆる地縁にもとづく「近所づきあい」である。「結い」が機能していた時は村人が少数の茅葺き職人の手伝いとして働き、葺き替え費用を軽減することができたが、現在はそうした集団の消滅により、職人にすべての作業を委託してしまっている。そして結果的に費用の高騰を招いている。

こうした現状に対し一手を打つため、男鬼楽座では学生や一般市民のボランティアを募り新たな形の「結い」の構築を行ってきた。同時に、伝統的な民家を地域資源ととらえ、地域の活性化に資する方法を確立することが、地域社会と伝統的民家を持続可能な形で次代に伝えていく上で不可欠である。こうした「地域と人を結ぶ」「次世代へ伝える」という活動を男鬼楽座を通して学んだことは、学生にとって貴重な経験だったのではないかと考える。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**

男鬼パネル

葺き替えイベントのチラシ

15 Taga-Town-Project

学生が地域の魅力発信

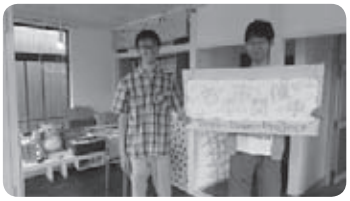
学生が、町の人と共にイベントや取材などを通じて多賀の魅力を発見すると同時に、それを内部・外部に発信する。そして、活動の中で学生と地域の継続的かつ新しいコミュニケーションの形を構築していくことを目指す。

TEAM DATA

チーム名： Taga-Town-Project
代 表 者： 岡崎梓織（人間文化学部）
メンバー数： 6名
指導教員： 迫田正美、松岡拓公雄（環境科学部）
活動場所： 犬上郡多賀町
関係団体： 多賀木匠会、多賀町商工会、有限会社 A-SITE
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24 H25 H26

PROJECT 実施事業

(1) 八百秀アパートプロジェクト



一箱古本市 (07/05)

(2) e モールたがプロジェクト

e モールたが 取材の様子 (09/22)

(3) お手伝い引き受けますプロジェクト
★見出し写真：観光客交通行動基礎調査 (11/08)

(4) まちのお祭りに参加

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

一年の活動を通して、学生一人一人が「建築」にこだわることなく、多様な活動を行い、地域や地域のコミュニティについて真剣に考えることができたという実感が得られた。活動の幅をより広げるという当初の目標を達成できたのではないだろうか。特に、学生たちだけで何かをするのでなく、町をあげて町について考えるという場にも関わったことで、広い視野を持って学生たちが地域コミュニティについて真剣に考えるきっかけになった。

また、「八百秀アパートプロジェクト」では町の人や観光客との交流を、「お手伝い引き受けますプロジェクト」の観光客交通行動基礎調査では、町の内外の人との新しいつながりを得ることができた。町からの依頼にこたえることで、町の知識が身に付いていくことの有用性を自ら実感した。

一方で、昨年度から問題になっていたプロジェクトの不安定な体制は解決できないまま一年間が過ぎてしまった。昨年度にも増して、メンバーが減少の一途をたどり、活動が頻繁な時は主要メンバーに負担がかかり過ぎたことで、学生一人一人のモチベーションの低下につながったことも大きな問題だった。メンバーの負担が大きくなればなるほど、プロジェクト内外双方での連絡不足が慢性化してしまい、意思疎通ができなかったり、関係団体への連絡を滞らせてしまうこととなった。メンバー不足ではスケジュールを立てていくにも限界があり、地域からイベント参加のお誘いを頂いても、満足に対応することができないことも出てきた。主要な活動を回していく事に精一杯で、Facebook、Twitter、HP等のこまめな更新ができなくなってしまったことも大きな反省点である。

そして、前半期で予算が必要な大きな活動が終わってしまい、予算を有意義に使えなかったことが一番の反省点である。

活動を通して学んだこと

e モールたがプロジェクトで多賀の知らない店や事業所に出かけ取材をしたり、地域おこし協力隊と共に多賀の山間部で活動したりしたことで、活動拠点のある駅前通りだけでなく、TTP の活動する場を広げていくことも大切なのではないかと考えさせられました。

浜奈緒子（地域文化学科 3 回生）

活動を引き継いだ時点でメンバーと話し合っていた「新しいことに取り組みたい」という計画が、達成できないことが多かった。もっと余裕を持って、また学生の「やってみたいこと」に寛容に活動を計画したかった。多賀で何かに取り組みたいという想いを失速させずに、地域でできることを探していきたい。

岡崎梓織（地域文化学科 2 回生）

e モールたがでは様々な事業所に取材に行き、普段の活動では行かないような場所も訪れた。イベントを開いて TTP の活動領域に地域の人に来てもらうのとは異なり、こちらから地域の人々の領域に入っていくものであるため、人と人とのつながりなど小さな部分までに触れることができて新鮮だった。

阪本ひかる（環境政策・計画学科 2 回生）

地域からのコメント

多賀町商工会青年部　古川良則さん

昨年度に引き続き、e モールたがにご協力をいただいています。若い学生さんたちから見た事業所の魅力を発信する、という新しい視点からの魅力発信は、取材された事業所のみなさんも新鮮なものかと思いいます。今年度は、Facebook の中での情報発信を越えて、冊子を新しく作ったことで、e モールたがも新たな段階に入りました。今後も新しいアイデアなどを提案してくれることを期待しています。

指導教員より

環境科学部　迫田正美

様々な形の活動をそれぞれのチームと学生個人の個性と創意によって自由で創造的な活動へ結び付けていくことが TTP の魅力であり、パワーの源であると思います。今年は地域の様々な方々と協働して作り上げていく活動を益々深めていってくれていることを頼もしく思います。しかし一方で、毎年メンバーが変わっていく中で、それぞれの活動を定常的に維持、継承し、深めていくことの難しさも改めて実感されています。4 月には新入生が入学してきますが、このような TTP の活動の魅力をアピールし、多くの仲間を増やしていくために、そして多賀町や域外のみなさんにも多賀町の魅力を発信していくために、どのような方法がふさわしいのか、どのような体制を作り上げるのか、チームみんなで工夫していってほしいと思います。e モールたがを冊子化したことは新しい可能性へのチャレンジとして、また活動の見える化、様々な人たちと相互に交流していくツールとしても有効だと思います。新年度は新しい仲間を迎え、プロジェクト内の連絡や作業の効率化、情報の共有の仕方など、課題を克服してますます活動を発展してくれることを期待します。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**

一箱古本市宣伝チラシ

16 かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-

地域よし、学生よし、古民家よし

彦根市上岡部町にある古民家を舞台に、「地域よし×学生よし×家主よし」の三方よしの古民家活用プロジェクトを展開する。古民家を地域交流の場、学生の学びの場として活用するため、改修作業、畑作り、交流イベントなど様々な活動を行っている。

TEAM DATA

チーム名： かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-
代 表 者： 山本千晶（人間文化学部）
メンバー数： 35 名
指導教員： 林宰司（環境科学部）
活動場所： 彦根市上岡部町
関係団体： 上岡部町自治会
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 **H24** **H25** **H26**

PROJECT **実施事業**

(1) 古民家改修事業

建具改修 (09/17)

(2) イベント開催事業

(3) ひょうたん作り
★見出し写真：湖風祭での販売 (11/14)

(4) 地域行事への参加

上岡部町地蔵盆 (08/22)

(5) 畑づくり

(6) 地域冊子の作成

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年1年の成果としては、建具の改修によって、居住空間を2つにでき、シェアハウスできるようになったことである。また、離れの改修が完成したことにより、離れをイベントスペースとして活用できるようになった。 1月に行なった「かみおかべ博物館」イベントでは、改修した押入れを展示スペースとして活用した。

昨年度から始めたひょうたん栽培では、今年は商品化を目指し栽培した。昨年度は、地域の方にお世話を頼り切りになってしまったが、今年はひょうたん班を作ったことで定期的に地域の方と連絡を取り、ひょうたんの世話をしに上岡部に行くことができた。また、ひょうたんランプ、ひょうたん人形といった実用性のあるひょうたんの飾り方を皆で考えることができた。外部のイベントにも積極的に参加し、ひょうたんのことを知ってもらえただけでなく、私たちの活動にも興味をもっていただけた。しかし、仕事の比重がひょうたん班のメンバーに行き過ぎてしまったこと、作業に来る人に偏りが生じていたことが課題である。今後は、ひょうたんの年間スケジュールを作り、作業工程を明確にする必要があると考える。

また、夏休みから地域冊子作成のため、地域のお年寄りの方にインタビューを実施した。子ども時代の思い出を聞き、昔の上岡部町を知ることができ、お年寄りの方と深く関わることが出来た。「かみおかべ博物館」には、インタビューをしたお年寄りの方が参加してくださった。お年寄りの方に外に出てもらうきっかけになればとイベントを企画する上で考えているが、参加してもらうために、チラシを配るだけでなく、私たちが地域の方に歩み寄り、話をすることが大切だと学んだ。それと同時に地域の方と最も関われる太鼓登山、地蔵盆といった地域行事には、今後も積極的に参加し、地域の方との繋がりを大切にしていきたい。

活動を通して学んだこと

イベントや改修作業を行っていく上で、チーム内の組織づくりの重要さを学びました。また、地域の方々と話をしていく中で、上岡部町と地域の方々との関わりの歴史を知ることができ、今後も上岡部町を大切にしていきたいと思いました。

井上真希（環境政策・計画学科２回）

かみおかべでは古民家の活用維持による改修や自然との共生について学べた。また、古民家に残された歴史に触れたり、地域の人との関わりの中で、上岡部町という地域についても知ることができたのではないかと思う。

臼井颯生（環境政策・計画学科１回生）

障子の張替えを行った時に、近代化や西洋化に伴い和紙の障子や和室が減っていることに気づきました。一昔前は和紙や和室は日本人の生活に欠かせないものでした。古民家を綺麗にすることで、忘れかけていた日本文化を再認識すると共に、その文化を受け継いでいかなければならないと感じました。

米山美沙紀（地域文化学科１回生）

地域からのコメント

上岡部町自治会長　赤田和男さん

この一年、幼児、園児、小学生とのふれあいは大変、賑わいが有り、餅つきに参加させて頂いた時はカボチャのあんのおはぎが珍しくて美味しかったです、臼と杵でつく餅つきが珍しくて感動しました。他にもピザパーティーや地蔵盆の夜店のお手伝いをして頂き、活気が増していました。古民家活用に、もっとお年寄りが参加して頂き、気楽にくつろげるような雰囲気に育てばと思う次第です。若い方とお話しすると、ぱっと明るくなります。これからも引き続き若い力を当町に注いでいただきますようよろしくお願い致します。

残念ながら稲村神社の春祭りが雨で中止になりました。今年は晴れることを祈り、ご参加ください。

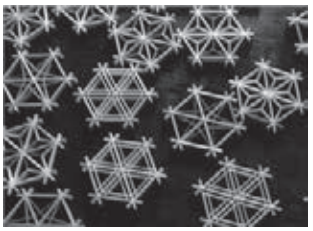
指導教員より（抜粋）

環境科学部　林宰司

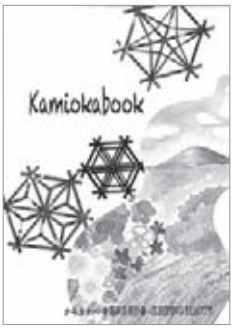
今年度は離れの大改修を一通り完了したことで、今後の地域向け行事の実施がしやすくなりました。また、上岡部の過去の暮らしに関する冊子作成のための聞き取り調査において、地域の住民の方々にご協力頂くプロセスで、学生と地域の方々とのつながりができたことも大きな成果であると評価できます。学生メンバーは入れ替わりますが、地域との良好な関係を継続できる方法を今後も構築して下さい。新年度より１名の学生が居住予定ですが、これにより更なる地域とのつながりができることを期待しています。

伝統野菜の栽培においては、野菜の種の保存という大きなテーマが見えてきていますね。滋賀県内にはいくつかの地域で種を保存するために伝承されている、異なる種類のかぶを植えないことや気象の変化や食虫害によって全滅しないように農家ごとに時期をずらして栽培するなどの地域的ルールや、かぶを下切りするなどという採取技術などもあるようです。植物を専門とする学生、伝承技術に関心のある学生を中心に、今後も伝統野菜栽培のための地域の知恵を調べつつ、自分たちで課題を考えながら栽培に取り組み、理解を深めていって下さい。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**



組子コースター



地域冊子

＜その他成果物＞
建具
押入れのペンキ塗り
襖の張替え
ひょうたん（マーブリング、ランプ）
大藪かぶ、小泉紅かぶら
イベントのチラシ

17 たのうらまちづくりプロジェクト

復興まちづくりから継続的な交流活動

東日本大震災の被害を受け、未だソフト・ハードの両方面での支援を必要としている田の浦にて、現地の方々との交流イベントを開催し復興に寄与するとともに、全国からイベント参加者を募り田の浦の「ファン」になってもらうべく活動している。

TEAM DATA

チーム名： 田の浦ファンクラブ学生サポートチーム
代 表 者： 野路猛（環境科学部）
メンバー数： 11 名
指導教員： 鵜飼修（地域共生センター）
活動場所： 宮城県南三陸町歌津地区田の浦
関係団体： NPO 法人田の浦ファンクラブ
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24 **H25** **H26**

PROJECT **実施事業**

(1) 田の浦における交流イベントの開催

あるきあるき会（06/20）

★見出し写真：海の運動会 玉入れ（08/16）

キャンドルナイト 点灯（03/11）

(2) 滋賀県内での防災意識啓発活動

(3) 田の浦ファンクラブ事務局活動の支援

(4) 定例ミーティングの開催

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）

1 年間の活動を通して、田の浦の方々との交流を今まで以上に深めることができたと感じている。東日本大震災から 5 年目を迎えた今年度は、田の浦ファンクラブ学生サポートチームとしては 3 年目の活動である。継続的に活動できていることを、支えていただいている方々に感謝したい。また、田の浦の方々が長期にわたり私たちを受け入れいただいていることは、ありがたいことだと感じている。

今年度の反省として、一昨年昨年と比べて新聞社などのメディアへの露出が極端に減ってしまったことから、広報活動の仕方などを考え直す必要がある。学生同士のネットワークを用いた他校へのイベントの告知や説明会といった、学生ならではの広報活動などを今後は考えていきたい。

この活動のイベントの参加者の中には「時間が経ってしまったけど一度は東北へ行きたかったから来た」という人がいる。この田の浦ファンクラブ学生サポートチームは、そういった人が東北へ訪れるきっかけづくりや、専門知識が無くても東北へボランティアとして行ってみたいと思っている人と田の浦をつなぐ役割もあるのではないかと感じている。

昨年度から、現地の方々のニーズに応える形で学生がイベントを企画し、「現地の方々の手だけでイベントが開催できるようにする」という終着点も見つつ活動してきた。そのなかで、今年は現地の方々による新たな企画として田の浦を散歩しようというイベントが月に一度行われはじめた。2018 年を目処に、田の浦の人々が自立的な地域活性化の活動を展開できるよう組織体制の構築を支援し、将来は田の浦の方々が自立し、交流活動の一環として私たちを呼んでいただけるようになってもらいたいという目標へ近づけたと感じている。

活動を通して学んだこと

今年度の活動を通して、田の浦の方々のあたたかさを改めて実感しました。留学・就活などで、現地に赴く学生の人数が減ってきても、現地の方々はこれまでと変わらず優しく迎えてくれました。こんなあたたかい繋がりを、これからも大切にしていきたいです。

吉田大樹（環境政策・計画学科３回生）

初めて現地を訪問した際は現地の方と上手く話すことができませんでしたが、訪問の回数を重ねるうちに打ち解け、今では冗談交じりに話ができ、気軽に頼ってもらえる関係になりました。これからも田の浦の方との交流を続け、現地の方に少しでも笑顔になってもらえるよう活動していきたいです。

大溝奈緒（環境政策・計画学科３回生）

東日本大震災から５年が経過し、活動地域である宮城県南三陸町歌津田の浦においても住民中心で復興が進められています。住民の高台移転も行われており、まちづくりの重要性がますます高まっています。学生が現地の人々との交流を継続することによって、今後も活動が広がっていくと感じています。

広瀬優樹（生物資源管理学科４回生）

現地の景色や被災された方のお話から、災害の恐ろしさ、虚しさがひしひしと伝わってきました。また、現場に行ってみないと分からない、被災地の苦悩があることも知りました。この経験がどう生かせるのか、私はよく考えてみようと思います。災害は、決して他人事ではないのだから。

山岡優太（地域文化学科１回生）

地域からのコメント

NPO 法人田の浦ファンクラブ担当理事・田の浦区長　千葉昇一郎さん

みんな、何回も来てくれてありがとう。来るのに時間もかかるし大変だろうけど来てくれることをいつも楽しみにしています。海の運動会は１年目より２年目、３年目と年を重ねるごとに、イベントが大きくなってきているし、参加者も増えているので来年はもっともっと集落の人だけでなく、町や一般の人が増えるように頑張って一緒に盛り上げて行きましょう。

ワカメ、ホヤ、ホタテ、カキといった海の幸を楽しみにしといてね。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**

活動のしおり

指導教員より

地域共生センター　鵜飼修

2011 年６月から開始した田の浦での活動も５年目を迎えた。活動のきっかけは木興プロジェクトによる番屋づくりであったが、その後、政策、資源、人文、看護の学生達も活動に参加するようになった。2011 年 10 月に現地の漁師さんを中心に設立された「田の浦ファンクラブ」がこれらの学生の受け入れとして機能している。

田の浦の復興のスピードは周辺の地域に比べても速く、高台移転がほぼ完了する状況となっている。学生達との交流を通じて活発な復興活動が展開されてきたからではないか、という声も聞く。復興のフェーズは変わりつつある。日本国中の中山間地と同様、少子高齢化、人口減少を如何に乗り越えるのかという活動が求められている。その中で、学生達による訪問は、地元の人々への刺激や活力となっており、一方、学生達にとっては、異国とも呼べる土地での自己認識と成長の場となっている。田の浦と彦根の距離はあるが、そうした仕組みを地域が有することが、これからの時代の一つの答えであろう。今後は、まちづくり活動を如何に発展・展開していくか、その継続性が問われることとなる。

18 タクロバン復興支援プロジェクト

共につくる集まる場！

フィリピンのレイテ島タクロバンでの復興支援を目的としたプロジェクトである。めまぐるしく環境が変わる被災地で、リサーチを行い状況を記録し、自分たちがどのようなことが出来るか考え実行している。

TEAM DATA

チーム名： タクロバン復興支援プロジェクト
代 表 者： 馬淵好司（環境科学研究科）
メンバー数： 16 名
指導教員： ヒメネス・J・R、芦澤竜一（環境科学部）
活動場所： フィリピンレイテ州タクロバン
関係団体： タクロバン市役所建築部署
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24 H25 H26

PROJECT **実施事業**

(1) 現状確認と海沿いの生活調査

海沿いの生活調査（05/12）

(2) 夏の現地ワークショップ

★見出し写真：夏の現地 WS（8/9）

夏の現地 WS（08/09）

(3) 春の現地ワークショップ

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）

初年度のプロジェクトとしてどのようにスケジュールを立て、現地とやり取りをしながら提案をしていくかが困難であった。また現地が海外のため状況を把握しづらく、どのようなものが必要であるか、どのような提案がいいのかを考えることが難しかった。その中で夏のワークショップは大学で基盤を作成してから、現地で住人の方々と協議しそれを迅速に変更できたことが、建設の成功につながったのだと思う。しかし春の WS から分かるようにもっと現地との通信を親密に行い、現地に行かなくても状況を把握できるようにしなければならないと考える。

またプレイルームに関しては、海沿いから移転し住環境などが変わった場所に、少しでも子どもの遊び場が出来たことで、子どもの遊んでいる姿を見ることが出来て良かった。春に訪れたとき、仮設住宅には人がおらず、プレイルームももぬけの殻となっていたが、かなり子どもたちが遊んだ跡があり、少しでも子どものスペースが作成できたと感じられた。しかし、使い古されたプレイルームは現地の大人の建設から離れたところにあったため、メンテナンスなどがおろそかにされ、大部分が壊れていた。もっと現地に入り込み、住人の手に受け渡すことが重要だと考えさせられた。

これからの活動するにあたって、どのようなスケジュール、業務体制で計画を進めていくのか考える必要がある。また、現地と密接にやり取りをし合い、現地に入り込んでものをつくる必要があると考えた。

活動を通して学んだこと

フィリピン・タクロバンと関わったことで、「住まう」ことの本質に触れ、学生と地域の関係性が重要ということを学んだ。そこでは生きるために住民自ら家を建て、生活を豊かにするために近隣関係を築いている。この活動を通して、建築は施主・管理人がいて成り立つことを痛感させられた。

馬淵好司（環境科学研究科環境計画学専攻２回生）

見ず知らずの日本人を温かく受け入れ、私たちが突然建設を申し出ても手伝っていただけた。こういった潜在的な環境があることと、建設したものが現地のためになることの難しさを学んだ。日本で設計していても現地の状況とは程遠い提案となっていたことが多く、離れた地で活動することの限界を感じた。

中村睦美（環境建築デザイン学科４回生）

途上国での復興というめまぐるしく状況が変わる中で現地について理解することが非常に困難で、大学での提案作成時も現地にとって何が良いのかという点で頭を悩ませた。大学で基盤を作成してから現地に入り、現状をみながら住人と一緒に物をつくっていくことでこのような問題が解決できれば良いと思う。

大野宏（環境科学研究科環境計画学専攻２回生）

地域からのコメント（抜粋）

ステイ先の住人　Bong Stone さん

あなたたちの働きは素晴らしい。台風ヨランダによって多くの住民が今でも困っています。

あなたたちが継続的にタクロバンに来て活動をしてくれることを、私はうれしく思います。コミュニティセンターは地元の建材を使って、よくできています。毎晩夜遅くまで考えていたからでしょう。また、エントランスのデザインはすごくおしゃれです。常設住宅がたくさん作られて、市民が移転していますが、市街地までの距離は遠く、お金が掛かるなど、考慮することがたくさんあり、まだまだ援助が必要です。またタクロバンに来てくれることを楽しみにしています。

指導教員より

環境科学部　ヒメネス・J・R

2013 年 11 月 6 日、台風ヨランダがフィリピン中央の島の海岸を襲った。この悲劇の 2 年後、多くの人々が国際機関や政府によって建てられた仮設的な集落に住んでおり、常設の集落の建設は保留中である。こういった仮設住宅の集落には住民のための公共的な施設が少ない。住民にヒアリングを重ねた後、この仮設集落 Badato village に子どものための遊び場を建設することに決定した。このプロジェクトは、現代のモジュールに合わせたフィリピンの建築様式で建てられ、経験と技術を相互に学んだものと言えるであろう。

また春のワークショップでは常設住宅の玄関先に日射遮蔽のためのプロトタイプ的な庇を制作し、常設住宅の住民のニーズを研究した。

学生は社会的事実と日本とは真逆である建築の文脈を学ぶことができ、非常に良い経験となったのではないだろうか。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**

子どものプレイルーム

可動式の庇

19 とよさらだプロジェクト

耕作放棄地での野菜作り

とよさらだプロジェクトは、滋賀県犬上郡豊郷町で使われなくなったビニールハウスを用いて、地域の方々に技術指導を受けながら野菜を栽培し、大学生協や彦根市の直売所などに出荷、販売するプロジェクトである。

TEAM DATA

チーム名： とよさらだ
代 表 者： 神野高志（環境科学部）
メンバー数： 14名
指導教員： 増田佳昭（環境科学部）
活動場所： 犬上郡豊郷町
関係団体： 豊郷町役場
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 **H21** **H22** **H23** **H24** **H25** **H26**

PROJECT **実施事業**

(1) 県大ファームでの野菜作り

ナスの収穫（08/18）

(2) 豊郷町での野菜作り

耕運機で耕起している様子（02/06）

(3) 農家さんとのお米作り

(4) サツマイモ堀り in 県大ファーム
★見出し写真：サツマイモ掘り（11/07）

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度の反省として、野菜の継続的な販売が出来なかったことが挙げられる。今年度は、豊郷町の畑や県立大学近くの圃場である県大ファームで育てた野菜を、彦根市の直売所やとよさと快蔵プロジェクトが運営する「Barタルタルーガ」、滋賀県立大学生協へ納品した。しかし、枝豆、ベビーリーフ、大根などは数回ほどの納品になってしまい、資金として使えるお金が減っただけでなく、野菜を納品する期間・量が曖昧になってしまい納品先の方々に迷惑をかけてしまった。原因の1つとしてあげられるのは、野菜の栽培量が少なかったことである。これは、野菜を植え付ける前に、栽培面積当たりどのくらいの収量が見込めるのか、どのくらいの期間にわたって収穫することができるのかを概算することが出来なかったためである。また、メンバー一人ひとりが、野菜の栽培・収穫・納品という一連の流れをイメージ出来ていなかった。そのため来年度は、栽培だけでなく収穫後の納品や販売といった部分にも力を入れていきたい。

今年度の成果として、豊郷町の夏祭り「とっと祭り」でのフライドポテトの販売に向けて、計画的にじゃがいもを栽培できたことが挙げられる。しかし、じゃがいもの収穫量は見込んでいた量の半分ほどになり、フライドポテトの約半分は市販のじゃがいもを使用することになった。これは、じゃがいもの栽培知識をメンバーで共有できていなかったためであるので、来年度は勉強会を実施して栽培知識を深めていきたい。

また、今年度も豊郷町の農家古川さんの田んぼをお借りして、無農薬米を栽培させていただいた。稲の種落とし、畔の草刈り、収穫など一年を通して、貴重な体験をさせていただいた。来年度も継続させていただきたいと考えており、より多くのとよさらだメンバーがお米の栽培に関わっていけるようにしたい。

活動を通して学んだこと

私は活動を通して、野菜を育てることの奥深さを学ぶことができた。天候や土壌などの自然条件だけでなく、野菜によって栽培方法が異なり、工夫して育てていく過程は知らないことばかりで難しかった。その分新しいことを吸収でき、やりがいを感じられた。

田出瑞季（生物資源管理学科１回生）

1年間活動して、食べ物のありがたさを改めて感じた。お店では当たり前のように並んでいる野菜だが、実際に育ててみると、台風・病気・害虫・雑草など様々な問題に直面し、無農薬で野菜を作るのは難しかった。そんな時、地域の方々にはアドバイスをいただき支えられ、交流の大切さも学べた。

川村桃子（生物資源管理学科１回生）

実際に圃場に出て草を刈り、作物の様子を観察し、作物を収穫し出荷する。土壌の質や今持っている知識から、どんな作物が育てられてどのくらいの値段で売るか考えることは、現場でしか味わえない経験だと感じた。私はこの活動で、自慢できるような良い品質の作物を育てていきたい。

内田伊久弥（生物資源管理学科１回生）

地域からのコメント

古川ファーム　古川傳次郎さん

毎年大学生の方にお手伝いいただき、生産者としては助かります。農業を通して学生さんとのコミュニケーションがとれてとてもいい経験になっています。若い方に農業を理解してもらって、今後の社会生活に役立てていただきたいです。

指導教員より

環境科学部　増田佳昭

今年度は、東近江市の乗馬クラブから馬糞を提供してもらって、土作りから取り組んだ。例年通り、豊郷町でのぼっちゃんかぼちゃの栽培とコメ作り、とっとまつりなどのイベント参加、県大ファームでの栽培とイベントなど、幅広い活動に取り組んだ。野菜の栽培だけでなく、豊郷町関係者のみなさんはじめ、多くの方にお世話になって、活動することができた。昨年度の問題点もある程度まで克服できたようである。

抱えている問題点は、交通手段についてである。野菜づくりには手間がかかる。手をかけただけいいものができるのだが、なにせ豊郷町までは遠い。年度の初めまでは先輩が残してくれた自家用車を利用していたが、それも老朽化で廃車して独自の移動手段が確保できないのが悩みの種である。学生の地域活動にとって移動手段は不可欠である。安全で経済的な移動手段について、よい知恵はないものだろうか。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**

新入生勧誘ポスター

無農薬米宣伝チラシ

枝豆、ベビーリーフ、ナスやオクラ、大根などの野菜（写真：坊ちゃんかぼちゃ）

20 八坂町プロジェクト

空き家で創る国際コミュニティ

滋賀県立大学が位置する八坂町で、空き家を改修して活用したり、イベントなどを通して地域の方と交流を行ったりして、地域に深くかかわり、自分たちが学ぶフィールドをより身近なものにします。

TEAM DATA

チーム名：八坂町プロジェクト
代 表 者：上田真優（環境科学部）
メンバー数：21 名
指導教員：永井拓生（環境科学部）、上田洋平（共生センター）
活動場所：彦根市八坂町
関係団体：八坂町自治会
近江楽座活動年度：H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24 H25 H26

PROJECT **実施事業**

(1) 空き家利活用 WS

草刈り作業（11/01）

家主への改修案説明（03/05）

(2) 小野邸改修案提案コンペ

(3) 八坂町郷土料理教室
★見出し写真：八坂町郷土料理教室（02/21）

(4) モチベーションマップの作成

(5) 改修イメージ表の作成

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度は、もともと改修予定だった空き家が改修不可になるという暗いニュースからのスタートでした。そこで申請時に立てた予定の多くが中止となってしまい、前期は活動が低迷していました。その中で自分たちにできることを考え行動していくことができなかったことは、反省点として挙げられます。

その後改修候補として挙がった小野邸では、短期的な目標をたてこなすことができました。しかし長期的なビジョンが立てられず、事業を急ぎ足に進めてしまいました。年度末にもう一度振り返り、来年度の長期的な目標・予定をたてたので、来年度はそれをもとに余裕を持った活動を行いたいです。

このプロジェクトに入るきっかけはメンバーによって様々ですが、何かやりたいことがあり参加しています。しかし一年間活動していく中で、始めに考えていた以上のことを学び、今後もさらに続けたいと考えている学生ばかりでした。このように、関われば関わるほど得るものが大きい、やりがいのあるプロジェクトへとこの一年で成長しました。

発足一年目の私たちは、何もかも手探りで、他のプロジェクトに学びながら進んできました。私たちは今年の経験を次の世代に教える必要がありますが、現段階では議事録以外に伝えるためのものが少ないので、今後はより頻繁に、次世代へ伝える資料を作っていきます。

まだまだ歴史の浅いプロジェクトだからこそ、自分たちで考え、決定し、どんな方向にも進むことができると思います。来年度も、どんなメンバーでどのような活動が生まれるのか楽しみながら成長していきます。

活動を通して学んだこと

八坂町郷土料理教室で、老人会の方々と一緒に郷土料理を作りました。計画段階から実施に至るまで、上田先生や八坂老人会の方に協力していただきました。このイベントが学生と地域の方々がお互いに理解を深められるきっかけになりました。これからも続いていってほしいです。

片山りん（国際コミュニケーション学科 4 回生）

今年から発足した八坂町プロジェクトを進めていくのは、想像よりも難しく、考える事が多い試行錯誤の 1 年でした。少しずつ地域の方などプロジェクトに関心を寄せて下さる人も増え、来年はより一層活動を進めていけるよう頑張りたいと思いました。

山中佐織（環境建築デザイン学科 2 回生）

このプロジェクトに入った当初は地域交流にはあまり興味がありませんでしたが、活動を行うにつれその重要さと面白さを知りました。また、メンバーが一体となって進んでいく様子を見るたびに続ける勇気をもらい、私自身の成長にもつながりました。

上田真優（環境建築デザイン学科 2 回生）

私たち学生のニーズにあった設計だけでなく、フィジビリティスタディや地域交流をしてこれたことで、建築の分野にとどまらない幅広い学びを得ることができた。人々のつながりを大切に、今後も改修だけではなく様々ことを理解し、自身の成長に繋げていきたい。

戸倉一（環境建築デザイン学科 2 回生）

地域からのコメント

小野邸（改修予定物件）家主　小野邦夫さん

八坂の家は、大阪に住んでいる以上活用もできず、空き家として残していました。どうすべきか分からず放置していたので、こうして学生さんが使ってくれることをうれしく思います。どのように使ってくださっても良いので、頑張ってください。

指導教員より（抜粋）

環境科学部　永井拓生

滋賀県立大学は琵琶湖を目前とした素晴らしい環境は魅力だが、中心市街地から遠く、地域との交流を持つには不便なところである。かといって大学に近い八坂町集落にはほとんど学生は住んでおらず、交流の機会もない。地元集落ともっと活発な交流を持つことは、より学生とまちとの距離を縮めることになるはずである。その思いで八坂町プロジェクトをスタートさせた。2014 年夏のことである。

本年度はようやく市街化区域で候補となる民家を見つけ、家主に実測や改修プランの検討をさせて頂く機会を得た。作業が始まって、学生は近所の方々にずいぶんお世話になったようである。普段の授業とは違う、まちに出ての活動を通じ、1 年間で学生もずいぶん成長したように思う。シェアハウス完成という大きな目標達成はまだまだであるが、こうした交流が始まったことは確かな成果と言えるだろう。家主さんを始め、地元の方々には深く謝意を表したい。

どんな仕事を成し遂げるにも、まずは日常の生活を構築することが最も重要なことである。自立した暮らしを営むことができなければ、社会のために役に立つような仕事は決してできるものではない。学生には、暮らしを築くとはどういうことか、地域で働くことにどういう意味があるのか、どうすれば地域社会に貢献し得るのか・・・人としての根源的な問に向き合い、活動を続けて欲しいと思う。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**

モチベーションマップ

改修案・模型

郷土料理教室宣伝ポスター

＜その他成果物＞
活動報告書

2-2 『らくざしんぶん』

チームが1年の活動をまとめた活動報告新聞です。共通トピックである①「**チームのビッグニュース**」②「**プロジェクト紹介**」③「**プロジェクト自慢**」④「**地域の声**」⑤「**成果と課題**」を中心に記事を作成しています。

近江楽座ホームページに、カラー版の PDF ファイルを掲載しています。ぜひご覧ください。

近江楽座 HP：**http://ohmirakuza.net/**

01 とよさと快蔵プロジェクト

02 あかりんちゅ

03 地域博物館プロジェクト

04 未来看護塾

05 政所茶レン茶゛ー

06 内湖における侵略的外来種駆除

07 フラワーエネルギー「なの・わり」

ひまわり油たくさん取れました！

フラワーエネルギー「なの・わり」

チームのビッグニュース

今年も3校の小学校へ訪問

三津町フェスタへの参加

湖風祭で子供たちと実験

成果と課題

08 障がい児・者、自立支援・共生社会プロジェクト

ボランティアサークル Harmony 新聞

09 人と環境を救う雨水タンク

近江楽座 ～廃棄物バスターズ～

Mother Lake

廃プラと水資源を活用した地域人・社会を目指して

雨水タンク

雨水タンクの成形 可能です！

～福祉事業所の方の声～ いしづみの家 西村さん

雨水タンクだけじゃない！ ～廃棄物バスターズ～

廃棄物バスターズのこれから

10 信・楽・人 -shigaraki field gallery project-

ビッグニュース!!

NETSU

ちょっときいてよ！プロジェクト自慢

信・楽・人

11 木興プロジェクト

12 たけとも（竹の会所・友の会）

13 おとくらプロジェクト

14 男鬼楽座

15 Taga-Town-Project

16 かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-

17 たのうらまちづくりプロジェクト

18 タクロバン復興支援プロジェクト

19　とよさらだプロジェクト

20　八坂町プロジェクト

3 共通プログラムの報告

3-1 活動の安全確保のためのスキルアップ講座

近江楽座における地域活動をより安全に行うために、実践的安全管理の進め方と、活動にともなうリスクの多い交通事故の防止について、専門家を招いて連続講座を開催しました。

第一回　ボランティア活動における実践的安全管理について

日時：2015 年 7 月 13 日（月）18：10 ～ 17：40
会場：交流センター　研修室 1~3
講師:NPO 法人国際ボランティア学生協会（IVUSA）
　　事業部　深山恭介さん

＜プログラム＞

1. IVUSA の活動紹介
2. 危機に対する備え（リスクヘッジ）
3. 危険予測訓練

日頃から学生に、研修会や講習、ブリーフィング等、活動の危機管理に対する取り組みを多数行っている NPO 法人国際ボランティア学生協会事業部の深山恭介さんを講師に招き、グループワーク等を通じて実践的な安全管理について学びました。

○ 危機に対する備え（リスクヘッジ）

日常や活動において、どんなリスクが存在するか「知る」ことで、どんなリスクが発生するのか「予測」が生まれ、リスクを未然に防ぐ「準備」や、発生した場合の「対応」ができる、これが危機管理の基本の流れになります。

この流れをつかむため、日常に潜むリスク（危険）を「発生可能性」の高低、「被害の大きさ」の大小で分け、それに対するヘッジ（未然に防ぐための回避策）を考え、書き出しました。

○ 危機予測訓練

昨年度の近江楽座の活動写真を見ながら、あらかじめ配られたシートに沿って、どんな危険があり、それに対しどのような対策をすればよいのかグループで考えていきました。実際の活動では刻一刻と状況は変化するため、考えすぎず瞬時に判断することが大切です。

深山さんは最後に、「絶対に大丈夫ということはないので、常になにか起こるかもしれない、なにか起きた時どうするかを考えて行動してほしい」とまとめていました。

第二回　交通事故防止について

日時：2015 年 7 月 15 日（月）18：10 ～ 17：10
会場：交流センター　研修室 1~3
講師：彦根警察交通課巡査長　西口しお里さん

前半は黒板を使い、実際に起こった事故を例にあげながら、交通事故とその防止について分かりやすく話していただき、後半は安全運転についてのビデオを見ました。

講義中、西口さんが何度も「優先意識を持たないでください」とおっしゃっていました。「信号が青だから大丈夫だろう、ではなく、横から車が出てくるかもしれないと思いながら、交差点へ進入するときはいつでも止まれるようにしよう」と。

また、自転車の危険行為についても説明していただきました。

3-2 中間報告会「伝えよう！活動のあしあと展」

日　時：2015 年 11 月 17 日（火）～20 日（金）
　　各日 18：10 ～ 17：40
会　場：交流センター　研修室 1~3
参加者：約 60 名

前半の活動を振り返り、ノウハウを共有し、伝えることをを目的として、中間報告会を開催しました。

1．活動の振り返り、記録

チームが前半に行った活動を事業ごとにきちんとまとめることで、活動を客観的に振り返るとともに、活動を継続していく上で重要な「活動記録」をチームに残していきます。

2. 活動の過程・ノウハウを、後輩に伝える。共有する

それぞれの世代やフィールドでメンバーが得た「学び」は、チームにとって、そして近江楽座にとっても、とても大きな財産といえます。

しかし、このような個人の「学び」は、意識しないと伝わることなく途絶えてしまいがちであり、現在一緒に活動している後輩や、これから活動に加わる後輩のために、それらのものを形にして伝えることが重要です。そして同時に、色々なチームの学びを共有して、後半の活動がより充実したものになっていく事を目指します。

＜プログラム＞

1. 各チームからの活動報告
2.「活動記録シート」へのコメント
3. コメントの共有

＜中間報告会日程＞

	グループ①	グループ②	グループ③	グループ④
日　程	11 月 17 日（火）	11 月 18 日（水）	11 月 19 日（木）	11 月 20 日（金）
参加チーム	未来看護塾	地域博物館プロジェクト	フラワーエネルギー「なの・わり」	とよさと快蔵プロジェクト
	ボランティアサークル Harmony	政所茶レン茶ー	廃棄物バスターズ	あかりんちゅ
	田の浦ファンクラブ 学生サポートチーム	滋賀県大 BASSER'S	信・楽・人 -shigaraki field gallery project-	たけとも（竹の会所・友の会）
	おとくらプロジェクト	木興プロジェクト	Taga-Town-Project	男鬼楽座
	タクロバン復興支援プロジェクト	かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-	とよさらだ	八坂町プロジェクト

第一部　各チームからの活動報告

スライドを用いて、前期に行った活動の報告と、今後の予定について発表しました。1チーム5分という短い時間のなかで、どのチームの発表もよくまとまっており、聴衆は皆メモを取りながら聞いていました。

第二部「活動記録シート」へのコメント

第一部でのチームからの発表を聞き、発表内容をまとめた「活動記録シート」を見て、チームへの質問や提案などのコメントをふせんに書き出します。それを「活動記録シート」が展示されているパネルに貼りつけました。ふせんは色ごとに用途を使い分けています。（黄：質問　赤：共感したこと　緑：その他）

第一部　各チームからの活動紹介

成果物を持参するチームもありました

第三部　コメントの共有

1チームずつパネルを見ながら、第二部で寄せられたコメントを紹介し、全体で共有していきます。司会は次のチームの学生が行い、質問にはチームのメンバーに答えてもらいました。

全日程多くのチームで課題に挙がったのは「チームメンバーでの情報・技術の共有が上手く行っていない」、質問が多く関心が寄せられているなと感じたのは「イベント等の広報はどのように行ったのか」でした。チーム内外への情報の発信には、どのチームも苦労していると感じました。

活動によって学科や男女比に偏りが見られますが、「色んな学部学科の学生がいたほうが活動の幅が広がる」「女子がいるとイベントで信用してもらいやすい」「力仕事も多いので男子がいてくれた

第二部　発表のメモなどをもとにコメントを書いていく

「活動記録シート」が展示しているパネルに貼り付けていく

ほうが助かる」と、様々な人がいてくれたほうがいいという意見が多かったのも印象的でした。

| まとめ

報告会後、参加者に書いていただいたアンケートには、「他のチームの様子を知ることができてよかった」というコメントが多く寄せられました。チーム内で活動しているだけでは、他のチームはどのような活動をしているのか、活動をする中でどういったことに成長を感じていて、どんな悩みを感じているのかなどを共有する機会も少ないので、良い刺激になったのではないかと思います。

活動記録シートは展示会終了後、ホームページにて公開しました（～３月末）。

| 活動のあしあと展

日時：2015 年 11 月 17 日（火）～27 日（金）
会場：交流センター研修室1～3、ホワイエ

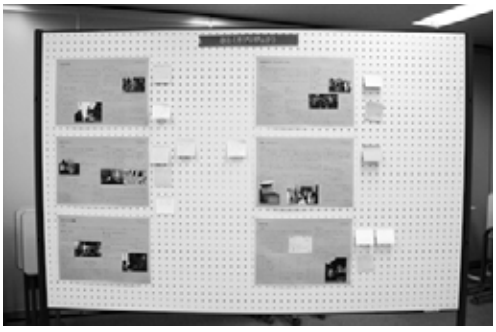
中間報告会の期間中、「活動記録シート」の展示を行いました。

また、24 日（火）からは、交流センターホワイエに移動し、報告会で全チームへ寄せられたコメントもあわせて展示しました。

第三部　会場内でコメントを共有＆質問回答

「活動のあしあと展」

司会の学生が各々工夫して寄せられたコメントを紹介



「活動記録シート」とチームへ寄せられたコメント

3-3 活動報告会

日　時：2016 年 4 月 16 日（土）9:30-16:30
会　場：中講義室 A7-101、A7 棟自習室
参加者：約 60 名

2015 年度近江楽座採択プロジェクトの活動報告会を行いました。

＜プログラム＞
○ 挨拶・感謝状の贈呈・プログラム説明
○ 活動発表　【パート1】～【パート4】
○ 全体総括

｜ 挨拶・感謝状の贈呈・プログラム説明

大田理事長より、開会のご挨拶を頂戴しました。

また、近江楽座が滋賀建設コンサルタント協会様よりまちづくりや地域再生に関する研究・提言、啓蒙活動等を行っているとして二年間活動の助成をいただいたことを受け、理事長より滋賀建設コンサルタント協会様へ感謝状が贈られました。

滋賀建設コンサルタント協会の梶雅弘様には、その後の活動発表でもコメントをいただきました。

｜ 活動発表

全 20 プロジェクトの活動内容に応じて、下表の 4つのテーマに分け、各テーマごとにチームからの発表と質疑応答を行いました。発表7分、質疑応答5分という短い時間で 1 年間の活動を最大限に伝えるべく、模型を用いたり、活動写真を中心

＜活動報告会　グループ分け＞

	【パート1】9:50 ～ 11:05 ＜拠点・ものづくり＞	【パート2】11:15 ～ 12:30 ＜文化・生活＞	【パート3】13:30 ～ 14:45 ＜防災・被災地支援＞	【パート4】14:55 ～ 16:10 ＜教育・普及＞
司　会	秦憲志（近江楽座事務局）	濱﨑一志（人間文化学部）	印南比呂志（人間文化学部）	竹下秀子（人間文化学部）
チーム	とよさと快蔵プロジェクト	スチューデント・ キュレイターズ	未来看護塾	あかりんちゅ
	おとくらプロジェクト	政所茶レン茶`ー	木興プロジェクト	滋賀県大 BASSER'S
	信・楽・人 -shigaraki field gallery project-	男鬼楽座	たけとも （竹の会所・友の会）	フラワーエネルギー 「なの・わり」
	かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-	Taga-Town-Project	田の浦ファンクラブ 学生サポートチーム	ボランティアサークル Harmony
	八坂町プロジェクト	とよさらだ	タクロバン復興支援 プロジェクト	廃棄物バスターズ

に説明したりと、各チーム様々に工夫をこらした発表を行いました。

また、学外から２人のゲストをお招きし、活動にアドバイスをいただきました。それぞれの立場や経験を踏まえ、活動を行う上で具体的なアドバイスや鋭い質問をいただけました。会場からも、地域の方や指導教員より、質問やコメントをいただきました。「古民家改修では耐震はどうなっているのか」「近江楽座で活動する意味とは何か」など、学生、教員、ゲストの間で活発な意見交換が行われました。地域の方は、それぞれのフィールドで活動しているチームの様子をいきいきと語ってくださいました。

<ゲストスピーカー>

○ 小島誠司（NPO 法人小江戸彦根・彦根城屋形船副理事長）
○ 本間浩平 氏（株式会社本庄／近江楽座 OB）

｜ 楽座新聞展示

会場の向かいの A7 棟自習室で、全チームの楽座新聞（A2 版）を展示しました。

｜ 活動成果展示会

日時：2016 年 4 月 18 日（月）～22 日（金）
9:00 ～ 17:00
会場：交流センター　ホワイエ

4/18（月）～ 22（金）には、交流センターホワイエにて、全チームの活動報告展を開催しました。

楽座新聞（A1 版）や各チームの成果物、活動紹介パネル、写真やアルバム等、チームの魅力を伝えるものがたくさん展示されました。

滋賀県建設コンサルタント協会様に理事長より感謝状を贈呈

指導教員や地域の方からのコメント

助言者からのコメント

パート 3（防災・被災地支援）の発表の様子

4 学生有志活動

4-1 近江楽座 合同説明会「楽座市」

" 近江楽座や近江楽座チームをもっと知ってもらおう！"、" 活動に興味を持ってもらおう！" という目的から、近江楽座学生委員会の呼びかけにより、15 の有志チームによる近江楽座説明会が開催されました。

| 学生委員会とは

近江楽座をさらに推進していくために、チーム間の交流・連携を目的として発足した有志学生による組織です。2006 年に、当時のプロジェクトチームの代表経験者が中心となり結成されました。学部・学科・プロジェクトの枠を超えて活動の輪を広げ、地域活性化に貢献するためのネットワーク形成を目指し、学生ならではの視点で近江楽座をサポートしています。

| 楽座市

日　時：2015 年 4 月 22 日（水）、23 日（木）
　　15：00~19：00
会　場：交流センターホワイエ

開催内容：

○ ブース相談会
○ 活動紹介発表
○ あかりんちゅキャンドルナイト
○ 2014 年度全チームの活動報告新聞の展示

＜参加チーム＞

- フラワーエネルギー「なの・わり」
- とよさと快蔵プロジェクト
- 未来看護塾
- ボランティアサークル Harmony
- おとくらプロジェクト
- Taga-Town-Project
- とよさらだプロジェクト
- たのうらまちづくりプロジェクト
- 信・楽・人 -shigaraki field gallery project-
- あかりんちゅ
- かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-
- スチューデント・キュレイターズ
- 政所茶レン茶〝ー
- 男鬼楽座（2日目のみ）
- 三階蔵部（2日目のみ）

開始直後から沢山の新入生が来場し、先輩たちの説明を熱心に聞いており、その場で「このチームに入りたい」と言っていた学生もいました。各チーム、それぞれのカラーがよくわかる展示・説明となっており、パソコンや成果物、アルバムなどを工夫して説明を行いました。

両日夜には「あかりんちゅ」のキャンドルナイトが行われ、交流センター前を彩りました。

楽座市の様子

活動紹介発表

ブース相談会

「あかりんちゅ」キャンドルナイト

4-2 CLSプログラムでの活動紹介

｜ミニ楽座市

日　時：4月13日（月）、22日（水）、23日（木）
　　12：10~13：10
会　場：センター広場（A2 棟前）

近江楽座の紹介と楽座市の宣伝のため、センター広場にテントを張り、屋台を出しました。政所茶(政所茶レン茶ˇー) やコーヒー(おとくらプロジェクト)、糸切餅（Taga-Town-Project)、キャンドル（あかりんちゅ）等、プロジェクトの紹介や様々な地域の品が提供されました。

終了後、テントは交流センターに移動し、楽座市本番でも使用しました。

「信・楽・人 -shigaraki field gallery project-」のワッフル

ミニ楽座市の様子

日　時：2015年6月13日（土）10：40～12：00
会　場：荒神山自然の家

本学のCLSプログラムが行った留学生の合宿にて、近江楽座の活動紹介を行いました。

最初にCLSプログラム教員のリピー先生から英語で、学生委員会から日本語で、近江楽座の簡単な紹介があり、その後それぞれのチームが活動紹介を行いました。日本語での紹介でしたが、学生はジェスチャーを用いたり、写真や実物を見せたりして、留学生にも分かるよう工夫しました。発表後には、留学生は興味をもったプロジェクトへ積極的に話しかけていました。

その後、会場にて一緒に昼食をいただきました。プロジェクトの話だけではなく、留学生の国や日本の生活のことなど様々なことを話し、親睦を深めました。

＜参加チーム＞

- ボランティアサークル Harmony
- 田の浦ファンクラブ学生サポートチーム
- あかりんちゅ
- 政所茶レン茶ˇー
- かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-

発表後の様子

4-3 ぞろぞろ会

「ぞろぞろ会」とは、チーム間の近江楽座メンバー同士の交流を目的として、2009 年に始まった取り組みです。2015 年度は、計 2 回開催しました。

チームや学部学科、学年の枠を越えて交流でき、チーム間の情報交換も行われました。

第 16 回 ぞろぞろ会

第 16 回 ぞろぞろ会

日　時：2015 年 6 月 17 日（水）
会　場：環境棟談話室 1（B1-200）
内　容：おにぎり作り

第 17 回 ぞろぞろ会

日　時：2015 年 12 月 1 日（火）
　　18：10 ～ 19：40
会　場：環境棟談話室 2（B6-200）
内　容：ワークショップ（テーマ：チームコラボ）
　　クレープ作り

第 17 回 ぞろぞろ会

4-4 オープンキャンパス

日　時：2015 年 7 月 25 日（土）、26 日（日）
　　9：00 ～ 15：00
会　場：交流センターホワイエ

　オープンキャンパスにて、近江楽座の紹介を行いました。親子で関心を持っていただき、真剣に話を聞いてくださいました。

開催内容：

○ プロジェクトごとの活動紹介、相談会
○ ミニプレゼン（1 日 3 回）
○ ムービーでの活動紹介
○ 活動写真スライドショー
○ 活動展示

＜活動紹介参加チーム＞

- 学生委員会
- とよさと快蔵プロジェクト
- 政所茶レン茶ˋー
- Taga-Town-Project
- かみおかべ SB（26 日は展示のみ）

＜活動展示参加チーム＞

- あかりんちゅ
- 滋賀県大 BASSER'S
- 地域博物館プロジェクト

近江楽座の概要説明

プロジェクトの活動説明、相談会

活動のパネル展示

4-5 近江楽座スキルアップ講習会「寺 co 座」

「寺 co 座（てらこざ）」とは、学生が互いに（co）学び合う場として、学生委員会が今年度新しく始めた取り組みです。延べ 27 名が参加し、参加者同士で教えあう場面も見られました。

＜趣　旨＞

近江楽座の活動のなかでそれぞれが学んだことを、学生同士で教え合い、互いの成長を図る。チームの垣根を超えて、楽座全体のスキルアップをねらう。

｜ その1　Illustrator で名刺をつくる！ ーデザインの始め方ー

日　時：2015 年 10 月 7 日（水）18：10~19：40
会　場：環境科学部棟　演習室 B2-301
参加者：14 名
講　師：学生委員会

様々な名刺を参考にデザインを考え、実際に Abobe Illustrator を使いながら、自分たちの名刺を作成しました。受講生一人ひとりに合わせ、わからないところは学生委員会を始めとする有志の先輩たちが丁寧に教えました。

自分に合った名刺のデザインを考える

様々な学科やプロジェクトから参加がありました

｜その2　Photoshop で写真加工！／プレゼンテーションのコツ

日　時：2015 年 10 月 8 日（木）18：10~19：40
会　場：環境科学部棟　演習室 B2-301
参加者：6 名
講　師：滋賀県大 BASSER'S
　　信・楽・人
　　とよさと快蔵プロジェクト

活動のプレゼンテーションのコツを勉強した上で、活動写真を撮る際に気をつけることや Photoshop を使った加工の仕方を実際に作業しながら学びました。

ほとんどの学生が Photoshop 初体験

講師の学生が丁寧に教える

｜その3　伝わる！プレゼンスライドの作り方

日　時：2015 年 10 月 9 日（金）18：10~19：40
会　場：環境科学部棟　演習室 B2-301
参加者：7 名
講　師：学生委員会

机を囲みスライドで教わりながら、間近に迫った中間報告会で使う発表スライドを考えました。実際に学生委員会の先輩がスライドを作った際に描いたラフやメモを参考にしました。

スライドの組み立てを考えながらラフを書いていく

実際に「わかりづらいスライド」の例も示しながら説明

5 他大学等との交流

5-1 富山県立大学視察

日　時：2016 年 3 月 2 日（水）11:00~15:30
場　所：本学 A7 棟自習室、食堂
　　犬上郡豊郷町吉田、彦根市石寺町

富山県立大学の学生団体と、近江楽座の学生が交流会を行いました。富山県立大学からは「COCOS」「水土里」、近江楽座からは「とよさと快蔵プロジェクト」「政所茶レン茶ˇ—」が参加しました。

＜スケジュール＞

11:00-　A7 棟自習室で学生交流会
12:15-　本学食堂で昼食
13:20-　豊郷町見学
15:00-　石寺町見学

学生交流

まず自己紹介を行った後、それぞれのプロジェクトが活動を紹介しました。質疑応答では、どのチームも積極的に手を挙げていました。「COCOS」と「とよさと快蔵プロジェクト」は空き家の改修、「水土里」と「政所茶レン茶ˇ一」は地元特産物の生産普及など、活動内容や目的が似ているところも多くあり、お互いに刺激を受けたようです。

お昼は本学カフェテリアにて、食事をしながら学生同士で交流を深めました。

「COCOS」と「水土里」の活動紹介

活動フィールド見学

近江楽座のフィールドを実際に見ていただくため、「とよさと快蔵プロジェクト」の活動地である豊郷町吉田のまちあるきをしました。代表の廣瀬さんの案内で今まで改修を行った物件や現在改修中の物件を見学し、その利用方法や運営など質問が飛び交いました。

「とよさと快蔵プロジェクト」 満ち家の見学

彦根市石寺町に移動し、「エコ民家倶楽部」のエコ民家を見学しました。その後コミュニティスペースにて石寺のまちづくりについてお聞きし、「田の浦ファンクラブ学生サポートクラブ」の OG である小島さんに、プロジェクトの紹介をしていただきました。

石寺町の取り組みを学ぶ（宅老所 ほほえみハウスにて）

6 情報発信

6-1 ホームページ、プロジェクトレポート、リーフレット

| 近江楽座ホームページの運営

URL：http://ohmirakuza.net/

滋賀県立大学における、学生の地域活動に関するポータルサイトでもある近江楽座ホームページの運営を行い、随時最新情報を更新しています。2014 年度に大規模リニューアルを行いましたが、学生たちの活動の様子をより多くの人に見てもらえるサイトにするため、2015 年度もリニューアルを行いました。

＜リニューアル内容＞

○ 各プロジェクトページにホームページやブログ、SNS 等のリンクを追加（1 チーム最大 5 件のリンクが可能）
○「学生専用ページ」の最終更新日を自動更新
○ アクセス解析機能追加
○ 過去 10 年間の「楽座文庫」アーカイブ化

| プロジェクトレポート

事務局スタッフが、実際にプロジェクトの現場を訪れ、活動レポートを作成・発行しました。本年度は計 4 号発行。発行したレポートは、学内食堂前にある近江楽座掲示板と、近江楽座ホームページ上で掲載しました。

＜ 2015 年度プロジェクトレポート＞

○ [かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-] むかしあそび&ピザパーティ
○ [とよさと快蔵プロジェクト] 改修合宿
○ [おとくらプロジェクト] おとくらライブ
○ [八坂町プロジェクト] 郷土料理教室

プロジェクトレポート
（かみおかべ古民家活用計画、とよさと快蔵プロジェクト）

| 活動紹介リーフレット 2015

デザイン：近江楽座学生委員会

近江楽座プロジェクトで活動する学生に依頼し、近江楽座全体の取り組みや、本年度近江楽座に採択された 20 プロジェクトを写真入で紹介するリーフレットを作成しました。今年度は各プロジェクトの活動地域・拠点が一目でわかる活動地域 MAP が付いています。

近江楽座活動紹介リーフレット 2015

7 付録

7-1 プログラム推進メンバー※

事業推進代表者	滋賀県立大学理事長　大田啓一
事業推進責任者	近江楽座専門委員会　委員長　印南比呂志

近江楽座専門委員会

環境科学部	浦部美佐子
	林宰司
	松岡拓公雄
	村上修一
	迫田正美
工学部	河﨑澄
	栁澤淳一
人間文化学部	石川慎治
	武田俊輔
	印南比呂志
	佐々木一泰
	細馬宏通
人間看護学部	伊丹君和
	横井和美
地域共生センター	鵜飼修

近江楽座事務局	秦憲志
	廣嶋泉
	田中真理子

※2015 年度 (平成 28 年 3 月末時点)

このほか、近江楽座に関わり支援いただいたすべての方にお礼申し上げます。

7-2 メディア掲載一覧

No	日　時	チーム	メディア・団体	見出し・視察内容
1	2015.10.15	とよさと快蔵プロジェクト	NHK/ ニッポンぶらり鉄道旅	「近江のパラダイス」
2	2015.10.26	とよさと快蔵プロジェクト	中日新聞	豊郷・岡村本家　「酒蔵祭り」　試飲が人気
3	2015.10.29	とよさと快蔵プロジェクト	毎日新聞	豊郷　名建築でハロウィーン　31日　仮装やカフェ、ライブ
4	2015.11.21	とよさと快蔵プロジェクト	びわ湖放送 / テレビ滋賀プラスワン	開学 20 周年！さらに飛躍する滋賀県立大学
5	2015.12.29	とよさと快蔵プロジェクト	中日新聞	県立大生　豊郷の古民家改修中　温故知新の年越し
6	2016.1.10	とよさと快蔵プロジェクト	毎日新聞	県立大生　民家をゲストハウスに　まちづくり実践
7	2016.1.15	とよさと快蔵プロジェクト	京都新聞	県立大生　今春開業へ改修　豊郷の古民家泊まって
8	2015.11.21	あかりんちゅ	びわ湖放送 / テレビ滋賀プラスワン	開学 20 周年！さらに飛躍する滋賀県立大学
9	2015.12.16	あかりんちゅ	岐阜新聞	ＯＫＢストリート 2 周年イベント　18 日にジャズ生演奏
10	2016.2.12	あかりんちゅ	NHK 大津	バレンタインキャンドルナイト告知
11	2016.2.16	あかりんちゅ	中日新聞	彦根灯花会　バレンタインキャンドルナイト
12	2015.12.23	未来看護塾	中日新聞	県大生が企画　ひこにゃんも登場　小児病棟でクリスマス会
13	2015.5.2	政所茶レン茶゛ー	滋賀報知新聞	政所茶レン茶゛ーの茶畑で　大学生と茶摘み体験
14	2015.5.12	政所茶レン茶゛ー	スマイルネット	一番茶摘みイベント開催のお知らせ、参加者募集
15	2015.5.25	政所茶レン茶゛ー	京都新聞	「政所茶」の一番茶摘み体験　東近江
16	2015.5.26	政所茶レン茶゛ー	毎日新聞	「茶畑の美しさ感動」県立大の留学生、初体験、東近江
17	2015.6	政所茶レン茶゛ー	スマイルネット	一番茶摘みイベントを開催しているときの映像撮影
18	2015.6.21	政所茶レン茶゛ー	滋賀報知新聞	これが銘茶「政所茶」です　西部大津店で PR 活動
19	2015.6.21	政所茶レン茶゛ー	中日新聞	政所茶　魅力知って　大津　奥永源寺の農家ら　試飲で PR
20	2015.11.12	政所茶レン茶゛ー	毎日新聞	交流深まる「匠の祭」＝オノミユキ
21	2015.10.30	政所茶レン茶゛ー	鉱脈社	飯田達彦著『日本茶の「発生」最澄に由来する近江茶の一流』
22	2016.2	滋賀県大 BASSER'S	環境省	自然再生モニタリング事例集　地域で見守る自然の変化
23	2015.4.18	フラワーエネルギー「なの・わり」	NHKFM/ オウミアイ	ひまわり栽培，搾油，出前授業等活動紹介
24	2015.11.29	ボランティアサークル Harmony	中日新聞	県立大　吹奏楽部などが演奏　障がい者招き音楽会
25	2016.1.26	木興プロジェクト	京都新聞	「自分の命は自分で守れ」被災者、津波体験語る

No	日　時	チーム	メディア・団体	見出し・視察内容
26	2016.1.26	木興プロジェクト	中日新聞	「自分の身　自分で守る」南三陸町の住民被災を語る
27	2015.4.22	おとくらプロジェクト	しが彦根新聞	県大生が取材し制作、創業年や特徴　高宮の36店舗紹介マップ
28	2015.5.1	おとくらプロジェクト	中日新聞	彦根で「フェイクフルーツ」展　ブローチやかばん　いかが
29	2015.7.11	おとくらプロジェクト	しが彦根新聞	高宮「座・ギャラリー」オープン　きょう脇本陣隣に、芸術家の展示スペース
30	2015.8.15	おとくらプロジェクト	中日新聞	県立大生が交流の場　彦根　古民家をギャラリーに
31	2015.10.24	おとくらプロジェクト	びわこ放送	おとくらプロジェクトの紹介
32	2015.11.27	おとくらプロジェクト	近江同盟新聞	桂三ノ助&桂米輝　おとくら寄席29日
33	2015.4.19	近江楽座	京都新聞	県立大生「近江楽座」の報告会　被災地活動や古民家活用発表
34	2015.5.17	近江楽座	京都新聞	県立大「近江楽座」プレゼン　地域貢献策　学生らPR
35	2015.5.17	近江楽座	中日新聞	県立大の近江楽座　学生が公開プレゼン　地域活性化へ活動PR

公立大学法人　滋賀県立大学
スチューデントファーム「近江楽座」
まち・むら・くらしふれあい工舎

2015 年度活動報告書

平成 29 年 2 月発行

発行　公立大学法人　滋賀県立大学
地域共生センター
〒 522-8533　滋賀県彦根市八坂町 2500
TEL. 0749-28-8616　FAX. 0749-28-8473
企画・編集　近江楽座事務局
印刷・製本　近江印刷株式会社
構成・デザイン　廣嶋泉

本書の一部あるいは全部を無断で複写・複製、転載することは禁止されています

最新情報は、近江楽座ホームページ：http://ohmirakuza.net をぜひご覧ください